

己周年誌



相武台史同好会

五周年誌（同好会規則、会計報告を除く）

相武台歴史同好会

目 次

1.	5周年を願みて	2
2.	相武台歴史同好一会活動の記録	3
①	年次記録表	3
②	昭和55年度事業報告	5
③	昭和56年度事業報告	17
④	昭和57年度事業報告	59
⑤	昭和58年度事業報告	74
⑥	昭和59年度事業報告	91
3.	相武台歴史同好会縄対	111
4.	金井先生の講義録抄	112
5.	会計の推移	128
5.	会 員 名 簿	133
7.	まとめ 今後の展望	134

表紙・題字 …………… 金成 孝一郎 （83歳）

絵 …………… 谷口 千鶴子

2. 相武台歴史同好会活動の記録

自55年1月19日 ～至 55年12月13日

昭和55年1月19日 ・発足、会名、代表者、会計の決定

・会員。名簿の作製

・会則の作成

・活動内容決定

2月16日 相模原市の概況

講師 市社会教育課 大貫先生

3月15日 相武台地区の境界を歩いて調べる

座間市の水源地（目久尻川）

小池弁財天等見学

3月22日 相模原市史跡めぐりコースの選定。打合せ会

- 4月12日 相模原市史跡めぐり。(バス).
講師 市立図書館古文書室 金井利平先生
- 4月19日 バスめぐりの反省会.
- 5月17日 相武台地区めぐり。3月15日に歩いた残りの部分を歩く。
- 5月21日 南多摩文学散歩。相模市立図書館、
読書友の会主催のバスに参加。
- 6月21日 図書館、古文書室に於いて、古代からの人類の生活について。
出土品見学(勝坂式土器) 講師:金井先生
- 7月12日 相模原の古代の地質、地形と相模原市史。
講師:金井先生
- 9月16日 会の運営について。会員の個人テーマ設定について。
- 10月10日 相模原市郷土史懇話会と共催、東京史跡めぐり。
・板橋区 近藤勇の墓 ・荒川 . 浄閑寺、回向院
・台東区 寛永寺、その他
(懇話会石上亀二氏に案内頂く)
- 11月11日 個人テーマについての中間報告
・相模原の年中行事について。
- 11月13日 橋本、相原地区遺跡見学
初めて見る遺跡に昔の人々の生活を偲ぶ。
- 12月 6日 一年間の会のあゆみの反省。
相使原の家庭に伝わる年中行事について。

(12月13日 谷口記)

あとがき

とにかく、どこから手をつけていいか、お話を聞けば聞く程、範囲が広がって……。歴史を調べて見て判ったことは、いまの私達の生活につながっている、そしていまの私達の生活は、また後世へ続いて行く……と、あらためて実感として考えられた。新しい視野が開けたことを喜ぶと共に、よき友を得たことを幸せに思います。(久保田)

1. 5周年を顧みて

相武台歴史同好会

会長 宮原 最二郎

広々とした無人の野にアツという間に団地住宅が出現。相武台に住むようになりました。

一体ここにも歴史が有るのだろうかと思っていた時、公民館で歴史講座が開かれ、終了後同好会が出来ました。引き続き金井先生の講義、土地の人々の古い話を聞き、相武台を知るためには、近辺の歴史も知る必要が有り、いろいろの所も見学してきました。その間、お互に気心の知れた人々が、転居、家庭の事情等で残念にも去って行きましたが、また新会員も増えました。

同好会は教室では有りません。会員各自のものです。遠慮せず積極的に、知りたい事・見たい所・思っている意見等、どんどん出し合い話し合っ、今後も楽しく続けて行こうでは有りませんか。

昭和55年度行事

相模原市内史跡めぐり

- ・と き 昭和55年4月12日 午後1時～5時
- ・主 催 相武台公民館。相武台歴史同好会
- ・誹 師 金井 利平 氏（市立図書館古文書室）
- ・コース

勝坂遺跡 → 有鹿谷 → 磯部頭首工 → 八景の棚 → 無量光寺（当麻山） → 谷原古墳 → 田名地層 → 田名八幡宮 → 大島諏訪神社 → 相原八幡宮 → 村富神社 → 渋野辺新田稲荷（呼ばわり山） → 上矢部の板碑 → 龍像寺 → 麻溝台一等三角点 → 60間長屋 → 相武台出張所。

1. 勝坂遺跡

大正15年（1926年）大山柏（おおやまかしわ：考古学者、戊辰戦争研究家、陸軍軍人、貴族院議員）氏が市域勝坂で発掘したのでこの名がある。縄文時代中期の有名な土器で顔面取手を特徴とする。この地点をA地点とする。その後B、C地点が調査された。昭和40年D地点において宅地造成が行われた際、堅穴住居址や土器（加曾利式）石器（打製石斧）など多数が出土し、約1700㎡が国の史跡に指定された。

2. 有鹿谷

勝坂遺跡の西側の雑木林が有鹿(あるか)の森で、洞穴から泉が湧き石の祠がある。水は田んぼを流れ鳩川に注ぐ。海老名の有鹿神社の御神体の石が毎年4月8日の祭礼の時に、神官・氏子に守られてこの地に来て奉安(ほうあん:安置し奉る)され、6月14日まで鎮座していた。これを土地の人は「有鹿さまの水もらい」といった。

3. 磯部頭首工

相模川の水を取り入れる水門のことである。県営の相模川(上流から見て)左岸用排水事業の一環として、昭和10年12月着工、1日平均100人、延べ2万人の人力によって昭和15年12月に完成された。この28kmの幹線水路によって、新磯・座間・海老名・寒川・有馬・茅ヶ崎・小出・御所見の各地城2,200町歩の水田が潤(うるお)されることになった。なお相模川地下を通り対岸の厚木にまでおよんでいる。

4. 三段の滝

鳩川の水を調整するために分水したもので、滝の水は相模川に流入する。

5. 「八景のたな」と「さいかちの木」

座間・上溝間県道沿いの下溝はけ通りは、はるかに大山・丹沢の山を仰ぎ、眼下に相模川の清流を望む景勝の地である。

この地続きのさいかちの老樹は永禄2年(1569年)武田信玄が小田原攻めの際この地を通り、戦勝を祈って植えたものといわれる。

6. 当麻山無量光寺

① 時宗の大本山で開祖は一遍上人である。弘長元年(1261)一遍上人はこの地きて金光院を営み、布教をされた。その後文永7年(1270年)弘安4年(1281)と三度錫(しゃく)を留めた(行脚中に三度滞在)といわれる。最後の場合、自ら頭部を刻んだといわれる等身大の尊像が寺の本尊で、市の重要文化財に指定されている。

② 「逆さ木」山門際のなぎの木。上人が巡錫(じゅんしゃく:各地をめぐる、教えを説く)の際立てた杖が、そのまま根づいたといわれる。

③ 開祖一遍・二世真教・徳本上人の名号石(六字名号を刻む)。

④ 東権現(廃寺になった東沢寺より移した観音菩薩を祀り東権現と称していた)・熊野権現(熊野の本宮、新宮(速玉宮)、那智の三山を総称したもので、辿り着いた人々は、極楽浄土へ行くことができると)・弁財天(音楽・弁才・財福などをつかさどる女神)の三つの小祠(しょうし:小さなほこら)。

- ⑤ 芭蕉の句碑「世にさかる 花にも念佛 もうし鳥 蕉翁) 文化5年(1808)頃当時の53代他阿霊随(号南謨)建立。
- ⑥ 丈水句碑「花は花 念佛よ念佛 当麻山 九十一翁丈水」厚木市、猿が島の俳人五柏園丈水・本名大塚六左衛門武嘉。文化五年没、(91才)
- ⑦ 御髪塚(五輪塔二基)徳川家康10代前の祖世良田有親・松中・親氏父子の髪を埋めた塚といわれる。
- ⑧ 歴代上人の霊域。中央正面が一遍の墓。
- ⑨ 「笈退(おいしゃり:弘安4年の80日にわたる干ばつの際、一遍上人の三日三晩の雨乞い祈念によって、清水が湧き出たという伝承の場所」の遺跡
- ⑩ お花が谷戸。お花は一遍を慕ってここに住み、念仏を唱えて一生を過ごしたという。

7. 田名の地層

表面から、黒土(表土)、赤土、礫層、岩層(中津層)の順に各層が堆積する。岩層からは貝の化石が発見される。赤土は富士箱根の火山活動による火山灰の堆積したもので、関東ローム層と呼ばれる。

8. 当麻谷原古墳(市指定史跡)

標高約50mの台地上に14基の古墳があった。昭和34年に1号墳が発掘調査された。古墳は7世紀後半ごろのものと思われる。古墳のあった地域は現在酒匂川水道ポンプ場となっている。

9. 田名の八幡宮

田名の鎮守である。祭神は応神天皇(渡来人を用いて国家を発展させたことされ、中世以降は軍神八幡神としても信奉された。)を主神に、もろもろの弓矢の守護神を祭る。9月1日の大祭は獅子祭ともいわれ獅子や神代神楽(じんだいかぐら)が奉納される。的祭は力祭ともいわれ、毎年1月6日に古式床しい奉射の行事が行われる。毎年3才から5才迄の4名の男児が選ばれ、的を射て豊作を祈る。末社の天地大明神を祭る行事で、市の無形文化財に選定されている。

○じんじ石、ばんば石、めかけ石

○烏山用水の碑 安政6年(1859年)烏山藩の手により完成されたが、翌万延元年(1860年)の洪水で決壊した。

10. 大島諏訪神社(諏訪明神)

大島の鎮守で、式内(延喜式・律令の施行細則…の神名帳に記載されている神社)石盾尾(いわたてお)神社であるといわれる。毎年8月27日の祭典の際行われる獅子舞は神奈川県が無形文化財に指定されている。

1 1. 相原八幡宮

相原一番地にあり、もと上相原橋本二ヶ村の鎮守であった。この御神体は鏡で、現在は華藏院で護持（ごじ：守り保つ）している。境内の樹木は相当の樹齢である。明治末期にこの神社を橋本の神明神社に併合しようとした政府の方針に氏子は反対した。

1 2. 村富神社

上矢部新田の鎮守である。矢部新田は延宝年間（1673～1681）ごろ、江戸の豪商相模屋助右衛門によって開発された。助右衛門は人格識見ともにすぐれた人物で、この地の開発は、甲州街道に対する裏街道の宿場を作るのが目的であった。本街道は武士の往来でうるさいので、幕府の許可を得てこの街道沿いに、油屋、鍛冶屋、木銭宿（きせんやど：旅人が米を持参し、薪代を払って旅宿に泊まる）、質屋、雑貨屋などを営ませた。検地反別（たんべつ：田畑の面積）192町9反9畝26歩だが、実際に開かれたのは、街道沿いのわずかな土地であった。助右衛門は宿場の形が整うと、開発地をただ同様の安い値段で売却し江戸へ立ち去った。

13. 上矢部の板碑

高さ1.1 m、巾36 cm、厚1 cm(?)の秩父青石（緑泥石片岩）の板碑である。板碑というのは中世に死者の供養あるいは、生前にあらかじめ死後の供養をするために建てた。平たい石の卒塔婆で、頭部を三角形にして上部に線を切りこみ、その下にぼん字や仏像を刻み、下に銘文を記してある。

上矢部のものは、上部に阿弥陀如来の像があり、その下の左右に蓮華の花瓶を刻み、中央に「乾元2年8月 日」（乾元2年8月5日嘉元に改元されている）と記している。市の指定文化財である。この板碑は、鎌倉時代この地に居館をもった矢部義兼の供養碑だといわれる。義兼は横山党の一族藍原原二郎大夫義遠の三男で、矢部三郎といった。小野妹子を遠祖とする横山義孝は、藏藏権介となって多摩郡横山庄に居住した。義孝から四代目が義兼で、長男時重は栗飯原姓を名乗って市域相原に、次男義遠は藍原を姓として武州相原に住み義兼の父である。義兼は建暦3年（1213年）5月の和田合戦で戦死したので、90年後の乾元2年（1303年）8月、遺族や旧臣たちがその追善供養のためにこの板碑をたてたのだといわれる。義盛の夫人は横山時重の娘であった関係から、当主時兼始め一族挙げて参戦し運命を共にした。

1 4. 澁野辺新田稻荷と「呼ばわり山」

澁野辺新田の鎮守で祭神は宇迦魂命（うかたまのみこと：稲をつかさどる神）である。新田の開発は文政元年（1818）から始められた。これより先、文化14年（1817年）に最上徳内が漆・檀（しどみ：クサボケの別称）の植付けのため廻村（かいそん：役人が村々を巡回し投宿）した時に、澁野辺村の役

人はこれらを栽培することを条件に、徳内に新田開発について幕府への斡旋(あっせん)を頼み許可された。開発されたのは約140町歩である。文政9年に新開場東端の街道沿いに16戸の農民が入植した。新田鎮守の稻荷さまはもと「すきつばいなり」といわれた。同社の左側に昭和30年陸軍兵器学校内から遷座(せんざ)した細戈(くわしほこ)神社がある。祭神は天照大神(あまてらすおおみかみ:太陽神、農耕神、機織神など多様な神格を持つ)、武甕槌命(たけみかずちのみこと:雷神、かつ劍の神とされる)、経津主命(ふつぬしのみこと:劍の神、軍神)である。

◎呼ばわり山

本元は武州多摩郡川口村今熊山(現八王子市上川町)である。山の頂上の今熊(いまくま)神社は27代安閑天皇の妃が、皇子が行方不明になった際、夢のお告げにより、この地に来て探し当てたので建立されたという。行方不明のものが出来た時、ここにお参りしてお願いすると探しあてることが出来るというので、「呼ばわり山」として関東各地から人々が集った。しかし、遠路を出向くのは大変なので、この地に約5mの山を築き同社を勧請して呼ばれることにした。

15. 洲野辺竜像寺

山号を洲源山と呼び、曹洞宗で愛甲郡七沢広沢寺の末寺である。縁起によると暦応年間(1338~1341)に、境川に大蛇が住んでいて人畜に害をおよぼすので、この地の地頭洲野伊賀守義博が退治したという。その時、三段にとび散った蛇体は、おのおの場所に葬り、竜頭・竜像・竜尾の三ヶ寺を建立した。その後三寺とも荒廃したのを、弘治2年(1556年)に巨海和尚が苦心して竜像寺を再興したという。本像は釈迦如来で、現在寺宝として、竜骨の一部と義博使用の矢尻(やじり)がある。左手の崖の中腹にある歴代住職墓地の南に接し旗本岡野家の墓がある。

16. 柴胡(さいこ)が原陸橋由来碑

最近建立されたもので、碑面に「陽炎や 柴胡が原の 薄曇」の芭蕉の句が刻まれている。柴胡(根を乾して使う)は東洋医学で使われる生薬で、特異なおいがあり、味はわずかに苦い。

?

17. 麻溝台一等三角点

日本陸軍の陸地測量部が、明治15年(1882年)に全国の地図を作るため、最初に設定した三角測量の基点である。下溝村の芝野、通称相模原畑5739番地イ号共有地(現在麻溝台2099番地)に、相模野基線北端点が置かれた。南端点は、小田急江の島線東林間駅の西方の座間市域にある。この南北両端の基点の間の距離は、5209m9697であった。震災後大正13年の測定では、5210m2125になる)これを底辺とし、三角形の西の頂点を鳶尾山(海拔235m厚木市中秋野)、東の頂点は高尾山(海拔100m横浜市港北区長津田)とした底辺の距離の測定により、南北各辺から頂点

の距離は算出出来る。この三角形は、さらに南は平塚の浅間山、北は武蔵の蓮光寺村、西は丹沢山、東は上総鹿野山を頂点として、全国的な三角網として拡大される。東京麻布の天文台をそれら三角点の原点とした。基線を設ける条件は、平坦な原野で見透しがきく、空気の澄んだ土地がよく、当時の相模野は、もっともよくこの条件に適していた。

◎60軒長屋

小田急相模原駅から徒歩10分の新戸向出口に、当時文部省の測地学試験場があり、9尺(約2.7m)に62間(約113m)の建物で60間長屋も呼ばれていた。

文化財展出品作品

相武台の地域を歩く

昭和55年5月17日

歴史同好会の数人と、私の住む相武台地区の外周、つまり境界を一周する為のハイキングに参加出来た。会員の一人金子静氏が手に入れて持参した昭和31~2年頃の地図には、家数は何軒も記されていない。駅の辺りに少しあるだけである。その地図と現在の地図を持って細かく歩いた。昔、さつま芋や陸稲が作付けされていた畑、桑が畑のまわりに植えられていた所には、家が立ち並び道路は舗装されていた。いく度か米軍キャンプの外柵の金網にさえぎられ、道を戻ったりしながら、当時村長であった父の言葉を思い出していた。食糧を確保しなくてはと、国(管財局)へ陳情に日参したこと。現金収入を得るために桑を植えさせて、



養蚕を奨励したこと。座間市と相模原市の境界のデコボコは、地主の所有地の入り組んでいた為等。又、行幸道路が出来るに当って、両市（町）の固定資産税収入もからんで交渉事が難航したこと。

駅前地区の区画整理事業は、当時、神奈川県庁の板橋源吉氏が設計され、たびたび私の家迄打合せに来られていたことを、ついこの間の事のように思い出した。（以下略）

久保田浩子メモより

相模原市立図書館古文書室見学

昭和55年6月21日

- ・講 師 古文書室 金井利平先生
- ・テーマ 古代の相模原の人達の生活その他
- ・内 容 金井先生のお話を聞きながら、出土品写真を見学した。

橋本遺跡見学会

昭和55年11月13日

「高座川」創刊号（橋本遺跡調査会）より抜粋

今、発掘調査が実施されている橋本遺跡をごぞんじですか。この遺跡には石器や土器が落ちていることは、近所の方なら昔から知っている事と思います。さてこの昔から近所の方や、研究者に知られているこの遺跡も、ついに開発の波に洗われることになったのです。産業構造の変革とともにおしよせたモータリゼーション（自動車の普及）は、現在の国道16号線ではおさまりきれず、橋本地区を含めた八王子バスパス建設の必要にせまられることになったのです。

橋本地区を通るバイパスは、橋本遺跡の一部を縦断することとなりました。橋本遺跡の調査はこうした経済的社会的要求の結果として実施されることになったといえます。調査は、バイパス建設による遺跡への影響や、やむを得ず破壊される部分の記録の保存を計る為に行うものです。調査機関は、相模原市教育委員会が、建設省や神奈川県教育委員会の協力を得て設立した「相模原市橋本遺跡調査会」（会長：座間美都治）が、実施することになりました。調査の費用は、道路を建設する建設省がすべて負担しています。

橋本遺跡の概要（1）

橋本遺跡が発見されたのは古く、それは明治32年（1879年）までさかのぼります。今の町田市相原に住んで居りましたアマチア考古学者の青木純造さんが「東京人類学会雑誌」という由緒ある雑誌で紹介されたのが始めです。青木さんは橋本遺跡のことを、「相模国高座郡相原村橋本、一本橋近傍の

畑より雨宮国太郎打製石斧二個及び有紋土器破片三箇を得たり」と述べています。

その後橋本遺跡がにわかに注目をあびるようになったのはずっと遠く、昭和36年になってからです。この年の夏に、八王子工業高校社会科研究部の先生と生徒達によって、瑞光寺の裏の畑の一面を発掘し、「凸字型遺構」というものを掘りあてました。出土した土器石器から、それは縄文時代中期末頃（4,000年前）のものと思われます。この時の発掘の様子は「相模原市史」第一号にも載っています。最近では、遺跡に隣接した「元橋本造跡」から15,000年程前の先土器時代と呼ばれる頃の石器も発見されました。このように橋本遺跡は、少くとも15,000年程前の先土器時代から、縄文時代中頃の最も栄えた文化を経て、奈良・平安時代にわたる集落のあった遺跡と思われる。遺跡の詳しい内容についてはまだ発掘調査が始まったばかりですので、具体的に触れることはできませんが、追ってニュースにその結果を報告するつもりです。

最後に橋本遺跡という名についてですが、以前は瑞光寺遺跡と呼ばれ、瑞光寺の裏の畑一帯を指摘していましたが、発掘をする調査区域が、南北500m東西に40～60mと広大なために「橋本遺跡」と一括呼称されることになりました。

その後の橋本遺跡について

今回この資料を調べてみて、我々が見学してから今年ですでに5年目になり、その進捗の調査も50年3月で現地の作業が終った、と、広報「さがみはら」で報じています。それで、その一部を参考までに記してみました。

1985.7.1「広報さがみはら」より

……調査の結果、約25000年前の先土器時代から、縄文時代、奈良・平安時代そして中世から近世に至るまでの遺構や遺物が出土する複合遺跡で、県内有数の資料の豊富な遺跡であることがわかりました。

……遺物は未整理の状態ですが、須恵器（すえき）土師器（はじき）などの土器や鉄製品などが出土しています。特に須恵器は八王子市の御殿峠を中心に多摩丘陵に広く分布する窯跡で生産されたものと思われ、消費地としての橋本遺跡との間に密接な関係があったものと思われる。中世及び近世・近・現世の遺跡としては溝状遺構・堀立柱建物跡・テラス状遺構・地下式墳・久保沢道跡・防空壕跡などが発見され、遺物としては板碑・古銭・陶磁器・金属製品などが出土しています。

以上のように橋本遺跡には、立地条件のよさから先土器、縄文、奈良・平安時代にわたって多くの人々が生活を営みました。これらの結果を報告書として発表できるのは61年度の予定です。

昭和56年度

相武台歴史同好会記録

自 昭和56. 1. 1

至 昭和56.12.31

1. 本年度の活動予定

①歴史、講座を聞く 毎月1回

講師 市立図書館古文書室 金井利平先生

②個人研究

前年度に引きつづき 女性は共同テーマ「年中行事について」を
男性は自由テーマをまとめる

③史跡めぐり

1. 本年度の足あと

年月日	内 容
S56.1.24	例 会 本年度の方針決定 公民館に於て (以下同じ)
2.14	歴史講座 江戸幕府の相模原農村の支配 ・講師 金井先生 (以下同じ)
3.19	① 家康の江戸討入りと相模原 ② 鎖国の実施
4.11	大化の改新と相模原
5.9	鴨立庵と相模原
6.13	(前のつづき) ①白井烏酔 ②相原の小川家 ③大化の改新による政治が確立
7.11	歴史講座 樹徳と伊東方成
	例 会 会の運営について、会費の改訂
9.12	歴史講座 相模原市における江戸時代の旗本
9.26	例 会 今後の進め方について 副会計役を新設、決定
10.17	〃 12月までの活動の確認
11.10	史跡散歩 会長の「文化財見学資料」をもとにして相模国分寺他史跡めぐり 好天に恵まれ紅葉も美しく1日たっぷり歩きました
11.21	歴史講座 明治初期における諸改革と世相、社会の動き
12.19	例 会 「個人テーマのまとめ」作製作業
12.26	歴史講座 相模原の「中等教育」の移り変わり 納 会 一年の反省と次年度への展望

(あしがき) 前年度に比べて一步前進したと思います。新年度はもっともっと意欲満々です。せつかくの楽しい会です。同好の友を誘いましょう。

昭和56.10.22発行

お知らせ

会員各位

相武台歴史同好会

会長 宮原 晟二郎

過日10月17日は定例会にご参集下さいまして有難うございました。その時定まったことを下記により（出席者にはご参考の為）お知らせいたします。

記

1. 本会は12月をもって年度が替りますので残る2ヶ月間の予定を確認しました。

・歴史講演会について

金井利平先生の時間を調整して、後日、日時を知らせます。

・史蹟めぐりについて

相模国分寺他。日時は追ってお知らせいたします。できるだけ11月上旬迄の間に実行いたします。

・個人研究のまとめ

仕上げは12月末ですが、現在まで出来ているのを11月定例会＝11月21日午後2時～4時にまとめて持ちよって下さい。

☆殊に女性会員は、共同テーマが「年中行事」ですので、『ふるさとの雑煮』について書いて持ちより、その他年中行事について、判っているだけまとめて来て下さい。

（以上）

相模国分寺史蹟めぐり

10月23日発行

★11月10日（火）午前9時相武台前駅改札口集合：雨天は翌日、

★海老名駅までの交通費は各自負担

★約4km、ゆっくり歩いて2時間30分

★プリント相模国分寺、弁当持参して下さい。

★コース 相武台前駅→海老名駅→温古館→現国分寺→東海古道→ヒサゴ塚古墳→旧国分寺跡→逆川運河→旧国分尼寺跡→弥生神社→清水寺→海老名駅

★まだまだ歩ける人は、清水寺より秋葉山古墳群その他座間の文化財を見て、相武台前駅まで歩きます。7km、3時間30分

個人研究のまとめ 昭和56年度

目次

- ・年中行事について 木村 富美子
- ・おふくろの味 竹野 和歌子
- ・「白味噌の雑煮」の思い出 谷口 千鶴子
- ・わが家の雑煮 野口 章恵
- ・ふるさとの雑煮、他 久保田 浩子
- ・私の子供の頃の年中行事（町田市相原） 富永 ナル子
- ・相武台の歴史のこと、その他 金子 静
- ・雑煮と私 服部 たき代
- ・文化財見学 宮原 晟二郎

★座間編

★相模国分寺海老名漏

年中行事について

木村富美子

年中行事は、人々の一年間の生活過程、生産生活における折り目に、神をまつり、人神共食を中心とした行事である。これは季節の折り目に行う行事であるから、必ず季節感を伴っている。

今私たちの生活から季節感が薄れている。冬でも暖房の部屋で、かつては夏の野菜であったきゅうりやトマトを食べたりしている、これは生活の向上であり、文化の発達であるかもしれない。しかし、本当にこれが豊かさなのだろうか。

日本には春夏秋冬の四季の変化があり、かつてはその自然の移り変わりを体で感じながら生きて来た。自然を見つめていなければ、四季の変化を敏感に感じ取らなければ、生活出来なかったのだ。この季節に従って農作業をした。土地の神を鎮めて収穫を祈り、収穫を感謝して神祭りをし、このように自然の中に神を置いて祈り祭って来た。季節の変化がすなわち生活のリズムであったのだ。

今、農作業も科学の時代である。冬の寒さを春の暖かさに変えることも容易である。科学の進歩は、人間の生活を便利にし、生活を豊かにした。しかし、その反面、自然の美しさや四季の変化を見つめるゆとりを忘れてしまったのではないだろうか。

今、私たちは物質の豊かさのみを追い求めて来たことを反省して、精神面で忘れて来たものを取り戻すときではないだろうか。

昔の人は季節の折り目ごとにいろいろな行為を行い、神をまつり感謝して来た。

今その年中行事をたどってみることで、人間と自然とのふれ合いを探ることが出来るのではないか。昔の人の生活の知恵を知ることが出来るのではないか。

年中行事を調べることによって、地域の人々の年中行事感や季節感、信仰などを知り、私たちの生活の中で残したいもの、子供たちに伝えたいものを知りたい。そしてその心を見つめたい。

①雑煮(ぞうに)

神さまにお供えした魚とか野菜とか珍しいものを全部下げて、ごった煮(さまさまの材料をまぜて煮たもの)にしたものをいう。芋、こんにゃく、八頭、焼き豆腐などを入れ、味噌仕立てで丸もちを入れるのが本来の雑煮である。

家長がこれを作り、家族と神様が一緒に食べる。神と人が同じものを食べ合うことによって神様はその家に定着すると言う、神人共食(神への供え物を皆で食べることによって、神と人または人と人との結合を強めようとする儀礼的な食事)の考えがある。

関東雑煮、特に東京は清汁(澄まし汁)と小松菜を入れ、角もちを入れるだけの雑煮である。これは徳川家康が質素を旨とした生活を命じたためである。

【我家の雑煮】

かつをぶしのだし汁にしょう油を入れ、とり肉、小松菜を入れ、煮立ちさせ、焼いたもちを碗に入れるだけの簡単な雑煮である。

結婚した年のお正月、私は里の母を真似てはじめてお雑煮を作った。お雑煮の碗を開けた主人が「何も入れるものを買わなかったのか?」と聞いた。何のことかわからず「ええ」と答えた。その午後私たちは主人の実家にお年始に出かけ、おせちのもてなしを受け、最後にお雑煮をごちそうになった。ごぼう、人参、大根、里芋、こんにゃく、油あげなどが入ったけんちん汁風の実沢山の中に焼いたもちが入っていた。「これがお雑煮?」私は小声で主人に聞いた。「そうだよ、今朝食べたのは何も入っていないで、家には元旦から何も野菜がないのかと思ったよ」「私の里のお雑煮はおもちと小松菜、入れるとしても鶏肉だけ、いろんなお雑煮があるのね」

結婚してはじめて母の作ったもの以外のお雑煮を食べた。

その家々で違うお雑煮の味。「ああ、私は結婚したのだ」とその時思った。

②年迎えの行事 大そうじ

家全体を清浄にする為である。家を清めて年神様をお迎えする準備である。

木枯しの吹きすさぶ中、家中をあけはなつて体や手をこごえさせながら、大そうじしなくても、暖かくなってからやるなり、秋の気候の良いうちにすればよいのにと、合理主義を唱えたこともあったが、家中力を合わせて家中をきれいにし新しい年を迎える準備をすることは意義のあることかも知れない。しかしマンション生活では畳を上げて干すこともままならない。

門松 注連縄(しめなわ)は神様が降りていらっしゃる目印。松は不老長寿の葉でめでたい木である。神の降りる標識を立て、家全体が聖域であることを表わす。

注連縄を家のまわりにぐるりと巻いたが、簡略化されて門口だけに張るようになる。示す縄、すなわち我家の清められた聖域であることを示す。

松飾りは一夜飾りを忌み、二十九日頃までに立てる。

お正月の松飾りのために日本の松が切られ、自然が破壊されると新生活運動をすすめる人たちに非難され、印刷された紙の門松を飾る家もあるけれど、大きな松でなくても、小さな枝でもいいから生きた松を飾りたいと思うのはぜひいたくだろうか。

他のところで自然はどんどん破壊されている。自然保護は日本中の人々が真剣に考えなければならないが、緑の美しさを保つためにも、年に一度のお正月、松の小枝を飾って新年を迎えたいと逆説的に思うのだが、間違いだろうか。

鏡餅。鏡には神霊がよりつくものと言う感覚がある。また中高にした形は心臓をあらわし生命力の源泉である。関西以西では、雑煮に入れる餅も丸餅である。

1月11日、下げた鏡餅を割ってお汁粉にする鏡開き。昔、部屋に飾られた鏡餅は乾燥してひび割れ、父はそれを金づちでくたくと、火鉢の上に金網を乗せて炭火でゆっくり、きつね色に焼いて食べていた。これが父の好物であった。

今暖房のきいた部屋では元旦を迎える前に青くかびてしまう。そのため容器に入って空気に触れないようなのが売っているが、何か味気ない。

おふくろの味 …我家の雑煮…

竹野和歌子

○すましぞうに

材 料 4人分)

鶏手羽	80g	だし汁	カップ3
小松菜	1/4束	塩	小さじ1
焼板	8切	しょうゆ	小さじ1
なると	4切	酒	小さじ1
切り餅	4ヶ		

作り方

とり肉は前夜一口大にそぎ切りにして、酒につける。小松菜は塩ゆでにして水につけておく。

出し汁を煮立てて塩、しょうゆ酒で味を整え、とり肉、小松菜（3～4cmに切る）、焼板（かまぼこ）、なるとを入れ、ひと煮立ちする。

切りもちを焼いて、一度熱湯にくぐらせてから椀に入れ、ひと煮立ちさせた汁をはる。

「白味噌 雑煮」の思い出

谷口 千鶴子

こどもの頃「うちでは二種類のお雑煮を食べる」ということが、とても自慢であった。

両親が京都の生まれだったから、元日は京都の白味噌に大根、八つ頭、アツアツを盛付けた上に、けずりたて鰹節をたっぷりかける。白味噌とかつお節の香りが程よく合って、何とも言えない。だしは

勿論、昆布だしである。二日目は東京風の小松菜、鳥肉、かまぼこ、なるとの清汁(すましじる)雑煮であった。

現在の我が家では、というと。やはり東京風雑煮である。主人の郷里、九州福岡では、青味(彩りを添える緑色の野菜)の小松菜のかわりに、白菜又は水菜を入れるとのこと。そこで我が家も、中の実にこだわらず、時によりいろいろ入れてしまう。

何にしる、我が家のひとりむすこ、この雑煮を余り好まない。どうやらのどにつっかえそうなのが気に入らないらしい。だから腕のふるいようがないというもの。

ところで、日本の家庭で、お正月にお雑煮を食べて祝うというならわし、いつの頃から定着したのか知らないけれど雑煮にもそれぞれの家のルールがあり、又、永い間には、その家独自のものとなって、少しずつ変わっていつてしまうのではないだろうか。

実は我が実家の純京都風と信じていた雑煮、ある時偶然手にした雑誌のグラビヤで、福井の雑煮と紹介されていたそれとよく似ている。京都の雑煮とは別であった。これには驚いたり感心したり。

父方の祖父は、福井小浜の出身と聞かされていたのだから、なおのことである。ともあれ、こどもの頃食べた、あの白味噌の雑煮の味は懐かしい。そこには若い日の両親の姿があり、幼い頃の姉や妹がいる。年とともに忘れ難い。白味噌の雑煮の思い出である。

(1981年12月10日)

雑煮

野口章恵

1. わが家の雑煮

私の母は、生まれは富山であったが、10代半ばより東京に出てきたので、作る雑煮は、ずっと関東風、東京のものであった。

(材料)

とり肉、人参、大根、なると、のり、青菜、角もち

(作り方)

だし汁にとり肉、人参のそぎ切り、(大根を少々入れることもある)を入れ、青菜のゆでたのと、角餅をさっと焼いて入れ、煮上がってから椀(わん)に盛って、なると・のりを浮かせた清汁(すましじる)の、ごくあっさりしたもの。

2. ふるさとのお雑煮(1981年版、主婦と生活社の歳時記より抜すい)

- ・北海道 歴史は浅いが、新鮮な魚介類やジャガ芋、トウモロコシ等たくさんの具が入る。
- ・仙 台 イクラと仙台の名産笹かまぼこが入った豪華なもので、だしは干しはぜでとる。角もち。
- ・金 沢 由緒ある土地だけに、具の取り合わせも端整で、大根、しいたけはいちょう切り、人参、ごぼう短冊、ブリ、もも肉、青菜、最後に黒豆のゆでたのを散らすのが特徴。
- ・長 野 雪国らしく貯蔵しておいたぜんまい、えのきだけ等山菜を入れ、実の多いお雑煮。角もち。

- ・東京 具はとり肉と青菜、焼いた角餅であっさりとしたすまし汁。
- ・名古屋 小松菜と焼きかまぼこ入り、みそ仕立てで、みそは赤味噌を使って素朴な感じ。
- ・静岡 魚も肉も入らず 野菜のみの具の少ない質素なもの。
- ・京都 まろやかな白味噌仕立て、人の頭になるようにと頭芋(かしらいも)を入れ 丸くなるように丸餅を入れる。
- ・愛媛 あなごの白焼きを使い、大根、人参、焼き豆腐、小松菜、丸餅で、白味噌・すましの両方がある。
- ・広島 特産のカキを使うのが特徴、あなごの白焼き、大根、人参、里芋、かまぼこ、丸餅、すまし汁。
- ・山口 牛肉を入れる。里芋、豆腐、油揚、青菜、角餅、すまし汁。
- ・長崎 エビや鯛等、海の幸がたくさん入った豪華なもの。里芋、とり肉、かまぼこ、カキ、あなごの白焼、青菜、すまし汁仕立て。丸餅。
- ・鹿児島 エビ、大根、こんにゃく、豆腐、青菜、みそ仕立てで丸餅を焼かずに入れる。

ふるさとの雑煮

久保田浩子

1, 甲府の生家で食べた雑煮

四角(長方形)に切った切餅を焼き、椀に一切れ盛り、具は白菜と千六本に切った大根が入った清汁でした。箱型のかつぶしけずりでうすくかいて、青のりをそえて、かつぶしをかけて食べました。

ところが、昭和10年頃前橋から近所へ移って来た方が母と大変親しく、その方から奨められて以来、次のような雑煮に変わりました。

かしわ(とり肉)、ほうれん草のすまし汁 焼いた餅。かつおぶし、のりは同じ。

(附記) 前橋は寒い地方であるから、それなりに、もっとゴテゴテした、その地方の特色あるものがあると思われませんが、前橋は都市である為か、又、たまたまその知人が、サッパリした雑煮が好きかで、私の母に奨め、母も何となくアカ抜けてシャレているような吸物風の雑煮に変えたものと思います。したがって甲府地方の伝統とは関係ないと思います。うす味の雑煮はおせち料理とよく口に合いました。

★おせち料理

きんぴら(ごぼう、人参)、煮豆(黒豆、大豆、いんげん)。こぶ巻、田作り(ごまめ)、数の子、かまぼこ、きんとん等。

2, 相模原市新戸(嫁ぎ先)の雑煮

餅は、焼いた長方形。厚さ大きさは甲府の生家のよりやや小型で、椀には2個盛った。

具は、下盛りといい、餅の下によそる。材料は大根(いちょう切り)、八つ頭又は里芋(乱切り)。三升炊きの飯釜で大みそかの夜、たくさん作っておく。水を大量に加えて湯煮をしておいて三ヶ日使用する。だし~すまし汁でだしは鮎。かつぶし、焼のり(青のり)をのせて食す。

(付記) おせちは、黒豆、きんぴら、田作り、数の子、なます、酢のもの)他にだて巻き、ようかん、こぶ巻、鮎の煮浸し又は甘露煮、だし鮎はからし鮎(鮎を竹の串にさして遠火で焼き、カラカラに乾燥した状態にして保存用として用いる)。こぶ巻は鮎を巻き、練炭(れんたん)火鉢で気長に煮込んだ。

海産物は買ったが、野山川でとれるものは全部自家生産で、調理はすべて女の手作りであった。

3, 1月の行事

- ・ 1日～3日 男は仏壇、神棚をはじめ火神様、稲荷様、家中の神々に三ヶ日の間、お灯明、お神酒 お洗米を供えて家内安全を祈った。
- ・ 2日 仕事始め 女は年始客の接待に忙しく、男は形だけでも軽い仕事をして仕事始めの恰好をした。例えば縄を絢(な)うなどして。
- ・ 4日 寺よりのお年始 元日に1升ますの大きさに切った餅を持参してお寺へお年始に参上し、寺からは壇家をあいさつ廻りする。
- ・ 5日 七草摘み
- ・ 6日 六日年越し 昨日摘んだ七草に、大根、人参、ごぼう、ほうれん草等野菜も添えて歳神様に供える。まな板の上を包丁、大箸でまな板をたたきながら歌う。
七草なずな何たたく
唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先に
箸たたく トトトン トトトン トトトン トン
おばあさんがやった後、こども達が楽しそうに順番にやった。
- ・ 7日 七草粥 昨夜神様へお供えした野の草や野菜を細かく刻み粥を作る。その時、三日間神様に供えたお洗米を貯めておいたものを一緒に炊く。餅はのし餅の切れはしの餅を入れて塩味で頂く。
- ・ 9日 ひきぞめ 前の日に精米を洗って、ごぎの上にひろげ、陰干しにしておいたものを石臼でひく。この米粉を団子(まゆ玉作り)に使う。
- ・ 11日 歳開き おしるこ、お供えした鏡餅をくだいて焼き、小豆しるこにする。
- ・ 13日 団子作り 寒餅つき まゆの形、まんまる、俵の形 小判、里芋の形に団子を作り、一斗ますに盛り上げた団子の山に立てられた、パラの木にさして白神様に供える。白神様は蚕の神様。寒餅(かんもち:小寒から大寒の間についたお餅)は、山芋、青のり等の材料をつき込んで、なまこ型にし、小口切りし冬の間のおやつにする。のし餅は寒い間の主食(雑煮)にする。
- ・ 14日 とんど焼き 左義長とも言う。先が三ツ又になった桑の長い枝の先に、団子をさして、正月飾りのしめ縄や門松等を燃やす火で焼く(あぶる)。焼けた団子を食べるとその年は虫歯や毒虫にさされることが無いと言い伝えられている。現在でも相模川の新戸河原や、お宮の境内で行われている。一ヶ所に集めて火を燃やしている。
- ・ 15日 藪入り 小正月ともいう。嫁が実家に泊りに行く。小豆粥を食する。
- ・ 20日 えびす講 けんちん汁、白いご飯、尾頭つきの魚を食べる。朝立ちえびすといい1升ますに財布や現金を、家族のめいめいが一緒に入れて、えびす、大黒様にお供えする。えびす、大黒天は、11月20日にお金を何倍かに増やしてお帰りをなさるといわれる。

この頃から農家の正月も終る。

☆けんちん汁 材料は大根、人参（イチヨウ切り）。ごぼう（笹がさ）、豆腐。いろりから下った自在鍵に大きな鉄鍋をかけ、食用油でいためた材料に醤油を加えて、後にだし汁でのばす。

けんちん汁を作りながら姑が歌ってくれた。

おいべすさんという人は 一に俵を踏んまえて 二にニッコリ笑って 三に酒を造って
四つ世の中良いように 五ついつもの若えびす 六つ無病息災で 七つ何事無いように
八つ屋敷をぶつあげ 九つ小蔵をおっ建てて 十で父っあん納まった

姑は四つ位まで知っていた。あとは『かながわ風土記』より。

（附記）新戸の家は兼業農家であったが、代々百姓を営んでおり農村地域で住んでいたため、この地方の風俗習慣をうけついで、いろいろな昔ながらの行事を行った。行事は単調な農家の生活にアクセントをつけ、偏りがちな食生活をいましめ、又、親せき、知人等の往来も、互に仕事を妨げぬようにも利用され、「捨てるものは農家には何一つ無い」といわれるとおり、種々とユーモアのあることばと共に無駄をなくし、くらしの知恵が受けつがれるよう配慮されて来たことが判る、例えば寒さに対応する為に、正月はカロリーの高い餅を食べ、蛋白質を補う為におせち料理に、田作り、かつおぶし、卵、数の子、豆を食べ、カルシウムの補給も図っている、

初午の油揚げ、いわしの頭も、貧しい農家でも、他人の目を気にせず大っぴらに食べることができたのだという。

4、農家の主な行事

農家の行事は農事ごよみにあるように、全国共通のものが多いが、相武台地区と最もかかわりのある新戸地区の特色のあるものを挙げてみると次のようになる。

- ・ 2月 初午、節分
- ・ 3月 ひな祭り
- ・ 4月 白山姫神社の祭礼

この地方の特産の小麦粉で酒まんじゅう（起源は、中国の三国志の時代、諸葛孔明が、南蛮征伐の際、暴れる河を沈めるため、人の頭に代えて小麦の皮で肉を包み、お供えをしたものが酒饅頭だったと）を作り、重箱に入れて親せき縁者に配りながら、祭りに招待した。下方（海老名、厚木、伊勢原、平塚）といわれる相模平野に住む親せきからは、田でとれた餅米をふかしたお赤飯が重箱で届くが、新戸からは酒まんじゅうであった。互いに祭りに招き合った。

- ・ 5月 大凧

端午の節句に相模川原で大凧を上げる。女は餅草（よもぎ）を摘んで柏餅をつくる。「草の花団子」と呼んでいる。広い河原を吹き上げる季節風の南風で大凧をあげ、親せき知人を招く、百畳敷の大凧は全国的にも有名で、最近ではテレビ局が取材に来たりする。

この頃からお茶摘みを皮きりに農家は忙しくなる。いわば農閑期最後のレクリエーションといえよう。

・ 7月15日の農休日

5～6月の農繁期中「お十五日には……」遊びに出かけることや買物など、おとなと子供の間でこの日を目標にし、楽しみにして働いた。新戸あたりの人々は町田、厚木へ出かけ磯部以北の人々は上溝、橋本、八王子へ出かけた。

・ 8月 八朔 農休日

土用丑の日には薬草つみ（げんのしょうこ、どくだみ等）をするのが女の仕事で、陰干しにして乾燥させて保存した。

13日～16日 お盆。まんじゅう、そば、ぼた餅をつくって食べる。

25日頃 風祭り 日枝神社の祭礼

祭礼の日には、平塚・茅ヶ崎から、朝早く魚屋が自転車で来て魚を置いて（売って）行くのも楽しみの一つであった。そば、赤飯・煮しめ・天ぷら・煮魚等・どこの家へ行っても同じごちそう。台風シーズンなので農作物が被害を受けぬよう祈る祭りである。

・ 9月 お月見は酒まんじゅう・すすき・果物や野菜を供える。さつま芋や里芋も、この時季はまだ初物ある。

お彼岸 入りぼたもちに明け団子。ところがこの団子も酒まんじゅう。中のお仲日は小豆飯。

・ 10月 お月見 酒まんじゅう、新しょうが、柿などを供える。

・ 11月 七五三祝い 当歳のこどもは白山姫神社へ集まり、集団で祝う。昭和33年から新生活運動により実施している。（昭和59年までつづいたが時代の流れでとりやめになった。）

えびす講 1月20日の朝発ちえびす様が、1年働いて家に帰って来られる日。料理は1月と同じ、けんちん汁、尾頭つき（尾と頭がついたまま、お祝いの席で好まれた）であるが、この時期は鯛よりも秋さんまがおいしく、新米が嬉しかった。

この頃になると、秋の穫り入れも終りに近づく。

・ 12月 冬至 ゆず湯へ入る、かぼちゃを食する。

・ 年末 白湯へ入る。正月用の餅米を洗った水を風呂桶に湧かして入る。翌日は、てんびん棒で肥料桶に、そのふろの湯を入れてかついで運び、近くの畑へまく、一見馬鹿げたようなこの行事も秋蒔き作物や霜除けをした冬野菜の為には、乾燥期にしめり気を与えることになり、合理的であり、感心させられたものであった。

餅つき・しめ縄づくり・おせち料理作り

年そば・福茶を食す。

年末の行事を全部終え、さっぱりと清められた家の中で、一年中の砂払い（“体内にたまった砂を除くことから”こんにやくのこと、も）。おでんをお茶菓子に、おせち料理の味見をしながら、男たちから「腕前が上がったぞ！」と褒められるといい気分であった。

5、古老からの言い伝え

暮の31日にいろりやへっつい（かまど）で燃すものは、茄子の枯枝（かれえだ）と菊の枯枝。それは「借金をなす…返済…なすから」と「良いことを聞く…きく…出会う…から」。現在でいう省エネにも

合値する。

卯・亥・ひつじに爪切るな。夜爪・出爪は恥をかく。

寅・甲・八日に物断つな（物を裁断する時は慎重にという意味であるとか）

片袖ほしいと夜出て来るぞ。（何が出てくるかは知らぬが、袖を縫いはじめたら、両袖縫ってから休め、という意味ではないだろうか。和裁は先ず袖から始めるので、最後まで仕上げよという意味ではないだろうか？）

- ・袖（そうで）ないことをするぞ。（正しくないこと、間違っただけをやるハメになるぞ、との戒め？
- ・衿をくけかけで立つな。（衿をくけかけで用に立つと、待ち針などを衿の中へ縫い込んで忘れてしまうから。）
- ・節分の豆を煎る時のことば、「何焼く、焼きかがし焼く、よろず耕作の虫の口焼く」と三べん唱えながら、大豆の枯枝を燃やして豆を煎る。又、ひいらぎの小枝に、よく焼いたいわしの頭をさして門口に飾る。どちらも作物に虫がつかないように、やく除けに行っているが、本当は、生臭さは焼いて肥料に使えということではないだろうか。

6. 結び……いとぐちを求めて

以上は私の体験と友人（新戸作文グループ）達の思い出話を元にして記録してみました。相武台歴史同好会は私たちの住んでいる相武台のルーツを探り、ふるさとの歴史を残すことを目的として発足いたしました。その為に、この二年間相武台にゆかりのある歴史を学び、史蹟をたずねることができました。一つを知れば、更にその奥を知りたくなります。いまは美しい、深みのある古さ、落ちつきを見せている神社、仏閣が往時の民生安定に役立っていたこと、又、時の支配者のありようも、おぼろ気ながらうかがうことができました。

いま、私達庶民の安定の支えになっているものは何であるかを考えます。

激動の時代を過ごして来た私たち。物質文明にあふれた今日を生活している私たちの日常も、移り変わる世のひとつまでありましょう。私たちは次代に、子孫に何を残してあげたらいいかを考えます。我が家に於いて、社会に於て。

支配者たちの栄枯盛衰と、それにともなう庶民の暮らし、暮らしの知恵、伝承の足跡をもっと知りたいと思うのです。この楽しさを、縁あってこの相模の地に、今生きる同好の友と分かち合って。（以上）

S 55.11.25 記

私の子どものころの年中行事 町田市相原

富永ナル子

・お正月

三が日の朝は、男が早起してお雑煮を作り、女はゆっくり起きました。父と兄二人が日頃、暖炉に火をたきつけ、おもちを焼いて、なべをおかまさま（自在のかぎ）にかけ、お雑煮を作っていました。

小学生のころ、元旦には新年の式典に学校へ行き、みかんのおみやげをいただいて帰りました。

2日、3日は年始廻りに行く日で、祖父と父は親戚に出かけて行き、母や祖母は年始客を迎えました。

・七草がゆ（1月7日）

うるち米、あづきのおかゆ。煮えたところへ、なずな、ふきのとうなどを入れた。神様に供えてあと、このおかゆをつめにつけて、この年初めてのつめ切をした。

・山の神 畑の中 おかざりとお神酒(おみき)を供える。

・蔵開き（年の初めに、吉日を選んでその年初めて蔵を開く）、鏡もちでお雑煮をたべる。

・せいの神（五穀豊穡の神様：どんど焼き）、小正月（1月14日：農耕に関する様々な予祝・年占(としうら)の行事）

うるち米粉でまゆ玉を作り、白い枝を立て、まゆ玉をまぶし、座敷に飾った。又、三つ又の枝にまゆ玉をつけ、せいの神を焼いて食べた。これを食べると病気をしないなどといわれた。せいの神にはお飾りや書き初めやだるまなどもやした。

小正月には女正月ともいわれ母も里帰り（実家に帰って骨休め）した。兄や私は自分のところのせいの神を済ませ、母の里でも祖父が用意しておいてくれたまゆ玉をもって、又、せいの神に行った。

1月15日の朝は、もちの入ったあづきがゆを食べた。

・えびすさま（1月20日） 戸棚に納っていたえびすさまを座敷に出して赤飯、煮物、お頭付きをお供えした。

・初午（はつうま：2月の最初の午の日） 稲荷さまに正一位の旗を立て、ごちそうをお供えした。祖母いわく、赤い旗にしたかったのに、お金が足りなくて紫にしてしまったそうである。

・豆まき（節分の夜） ほうろくで大豆を煎って、一升ますに入れ、まず年の数だけ豆を食べた、「福は内、鬼は外」というだけで豆はまかなかった。

・ようかぞう（2月8日） 一つ目小僧が判コを持って、夜やってくるから戸口や縁側にゲタなど履物をおかないよう注意された。判で押された、履き物を履くと病気になるといわれた。又、一つ目小僧がびっくりして帰るように、目のたくさんあるかごを戸口に置いた。

・女の節句（3月3日） おひな様を出して飾り、ひしもち、あられを供えた。ひしもちの赤は食紅、緑はくさのはな(よもぎ)で色をつけた。あられはのしもちの切り端を小さく切り干して作っておいた。

・お彼岸 家族全員で墓参り「入りぼたもちに明けだんご(彼岸の入りの日にはボタモチ、彼岸の明けの日にはだんご)、中の中日あずきめし……」祖母の口ぐせ、又、講中で念仏があった。

・男の節句（5月5日） 内のぼり、しょうきさま、金太郎の人形を飾る。

*しょうぶ湯……池のふちからとってきて、風呂に入れた。

*柏もち……柏の木から葉をつんで作った。

・お盆 新しい竹をまわりに飾り、ござを段にかぶせて盆棚を作る。仏壇から位碑・かけじくを出して一番上に飾り、なす、きゅうりで牛馬を作る。黒いもの葉(はすの葉の代用)の食器、麻の芯のはしで供える。夕方お墓へ家族全員でご先祖様を迎えに行く。お墓にお線香をたてお線香のけむりに先祖が乗って帰って来ることになっていて、又、盆の終りには逆にお線香に乗せて送って行くことになっていました。

・秋祭り（8月20日） 諏訪神社のお祭り しし舞い、出店、親戚中の人が集まる。酒まんじゅう、

おそば（うどん）でもてなす。

・お月見（9月） すすき・おみなえし・きく・われもこうなど秋の七草を野山からとってきて緑先に飾る。又、おぜんを出して柿・栗・里いも・さつまいもなど秋の農作物をお供えし、酒まんじゅうを供える。

・えびすさま（11月20日） えびすさまを座敷に出して、ごちそうを供えた。11月23日の私の誕生日祝といつも一緒にされていた。

・冬至（12月） ゆずをお風呂に入れた。

・すすはき（12月） 家の中にある家具などすべて外に出し、しの竹で作った大きなほうきで、すすのついた天井などきれいにした。神具・仏具は庭できれいに磨き、家具は外ではほこりを払い、お勝手もすっかり掃除をした。曇も日光にあて、すすはきの終わった日は、とても気持ちがよかった。子どももよき手伝い手であった。

・もちつき（12月29日） 五升釜と三段の早ぶかし、大きな臼で父と祖父が交替でつき、手あわせを母や伯母がし、祖母が大きなのし板でのし、とてもにぎやかでたのしいもちつきでした。あんを煮ておいて最後に、じぜいもち（大福）をつくり、お腹いっぱい食べました。もち米だけでなく、栗の入った黄色のおもちが主体でした。

・大晦日 しめなわに秋にとれたわらで父が丁寧にないました。おかざりは祖父が元気だった頃は祖父がし、その後父がやっておりました。和紙をたたみ、切り出しで切り込みを入れ、折ったりして作り、それに、しの竹を差し込んで水神様（水色と白）、こうじん様（赤色と白）、しめなわにつけるお飾りなどつくり、神様にあげてから、飾りつけました。

だいたい、うらじろ、ゆずり葉なども用意しました。

年越しそば（そば粉、やまいも入り）も母の手打ちそばでした。

雑感

以上私の思い出すままに記してみました。これを機に、父母からもっとくわしく聞き書きをしてみようと思いました。一つ一つの年中行事にはそれぞれいわれもあるでしょうし、生活の節目として、常に心新たに家族で力を合わせて暮らしていたように思います。

ふと、今の我が家の年中行事を考えてみますと、会社員の主人、住まいも団地とあって、私の子どもの頃の年中行事との結びつきは少なくなっています。しかし、ここをふるさとにしている我が子たちに残せるものは残して行きたいと思います。

父母もまだ健在で 兄一家と一緒に暮らしており、現在も、このような年中行事はやっております。母は酒まんじゅう、柏もち、草もち、まゆ玉、こんにやくなど、時節に応じ作って楽しんでおります。私も教えてもらって時々作ります。そして娘にも伝えたいと思うこのごろです。

*相原のお雑煮 里いも（うすく輪切り）、だいこん（いちょう切り）、ごぼう、人参（ささがき）、こんにやく（たんさく切り）と、かつおぶし出汁で煮る。味付けは、しょうゆ味。焼いた角もちを入れ、食べる時上に青のり、かつおぶしをかける。

*福岡（九州）のお雑煮（塩ぶり、かまぼこ、貝柱、しいたけ、花型人参、ごぼう）を竹ぐしにさし吸物風の味付けの中に入れて煮る。かつお、菜はゆでる。おもち丸もちで、こんぶを敷いて煮て、やわ

らかくして、よそる（器に入れる）時に合わせる。

我が家では両方のお雑煮をします。

相武台の歴史のこと其他

金子 静

何か書かねばならぬ、資料は容易に入手できると思って、気安く相武台地区の自治会活動の、その出発点より今日までの発展の歴史を書くことを引き受けた。然し書けば書く程自分にも他人にも残念なことだらけ。確信を以て書けることは。現在、市の行政上の区分での、相武台地区に27の自治会があり、加入世帯数が約6805世帯であり、未加入世帯を入れて、56年11月1日現在6,897世帯。人口22,017人であること。昭和45年10月に相武台出張所ができて、市の人口統計に表示されるようになった当時の4,118世帯、13,713人から見れば、約70%の増加であること。相武台地区の、他地区に比較して最も飛抜けている特長は、面積125平方km²（全市9,077km² 比1.4%）の最少面積であること。人口密度1km²当り15,977人で最高であること。（東林地区の11,226人の他は1/2以下で、全市平均約4,753人であることを見ても如何に密度の高い地区であるかが伺われます。

発展の歴史を調べたのだが昭和31年頃の発足以来の、唯の25年の歩みすら正確な疑点のないものが得られなかった。

自治会とは、名の示すとおり地域住民の自主性を尊重し住民の下からの民主的な運動であるべきもの、というたてまえ論がどれ程生かされているか。現在広く全国的に言われる住民の無関心の原因、責任の所在の究明等々……、問題を多く後日に残しておく。

卑怯（ひきょう）、無責任のそしりは甘受しよう。筆過（ひっか：発表した著書・記事などが原因で官憲や社会から受ける制裁または処罰）の恐ろしさを知らない人には理解してもらえないとあきらめて。

割り当てられた頁の余白を利用して……。

1. 軽い気持ちで入った歴史同好会であったが歴史とは何ぞや？ と考えるようになり、好奇心から歴史学、歴史哲学の勉強（という程でもない）をはじめた。羽仁五郎（マルクス主義歴史理論に基づく明治維新史研究を開拓）も歴史学者だ。ただイデオロギーが随所に出で、羽仁式歴史観で一寸シックリしないが、良いことを言ってるな、という点も多々ある。三木清（新カント学派の人間学的立場から後にマルクス主義哲学、さらに西田哲学に接近、治安維持法違反容疑による逮捕、獄死）全集を買い込んで読んでいる。難解だ。まだ入口に片足かけたただけだ。難しい、わからぬことだらけ。然し、読みつづけるつもりだ。

2. 昨夜（S56.12.16日）“中国を知り、中国語を学ぶ会”で先生から、こんな本が出ていると紹介された本の話。“日本語訳の題“日本がとても心配です”そして写真にのっている表誌の帯にこんなことが書いてある『超先進国日本へ欧米の逆襲はじまる！！ 経済戦争で世界を席卷する日本は、いまやアメリカを陵駕しようとさえするスーパーパワーである。しかし日本のあまりにも無謀な経済戦略は欧米のひんしゅくを買い、戦前のA・B・C・D包囲網時代の撤を再び歩もうとしており、彼等の逆襲を

受けかねない緊張状態にある凋落か繁栄か、それとも「21世紀のモデル」になるか。日本は重要な決断と選択の岐路にたたされている。本書はそうした日本への処方箋である』。

これはことし（S56年12月1日）台湾の中央日報に掲せられた「足堪憂慮的日本」のホットニュースである。一個外人的客観立場対日本許多潜在的危機作深入的剖折 批評哭忠告加春鼓晨鍾震驚日人。

筆者は日本の某大学助教授である。国籍は台湾の中華民国人である。日本国版が売り出されたら是非読みたい本である。

上に“A・B・C・D包圍網”とあるのは、大太平洋戦争開戦の大きな動機の一つである。当時日木の軍部が国際連盟の反対決議を無視して、中国、満洲の占領をやったとき、Aアメリカ、Bプリテン（英）、Cカナダ、Dオランダの日本を取り巻く四ヶ国が、海上封鎖をして、日本が生死をかけて大太平洋戦争に突入した故事を言っている。パールハーバーから40年、今度は独占資本が……。歴史は繰り返すとう。困ったものだよ！ 正しい与論、正しい歴史を学び、二度と誤りを繰り返したくないものです。

雑煮と私

服部たき代

私の思い出のお雑煮は、野菜がたくさん入っていて焼かない餅（四角）を煮て、最後には汁がどろどろになるものです。

私はそのお雑煮が嫌い、三が日はなるべくお雑煮を食べないで、おせち料理だけ食べるようにしていました。

材料 肉（豚かとり）、大根、里芋、人参、小松菜、なると

お餅をとかしたお雑煮は、私の父の好みでした。山梨県の上野原で生まれて育った父の個人の好みなのか、上野原地方の習慣なのか、父がもういないので分かりません。

現在あまりお餅が好きでないのは、昔のお雑煮のせいかも知れません。

父のいないお正月のお雑煮は、焼いたお餅をいれてあっさりしたものを作っています。

（以上）

相模国分寺・海老名編

昭和56年11月10日

天平13年2月14日。聖武天皇（在位724～749）は詔勅（しょうちよく：天皇の発する公式文書）をもって全国に国分寺と尼寺（国分尼寺：こくぶんにじ）を建立させ皇室の勅願寺としました。詔勅（しょうちよく）の内容は佛陀の加護によって国民の幸福を求めるというものでした。

国分寺は金光明四天王護国寺（こんこうみょうしてんのうごこくのてら）本尊丈六の釈迦仏像、挟侍（きょうじ：脇侍）菩薩像二体であった。尼寺は法華減罪之寺（ほっけめつざいのてら）：本尊・丈六・阿弥陀三尊であった、

- ①**国分寺** 法隆寺式の塔と金堂が横一線にならぶ。この型式は奈良時代以前のもので詔勅の出る前から建立されており、これを国分寺に流用したのではないかとされている。
- ②**尼寺** 大安寺式で中門、金堂、講堂が縦に一直線にならぶ奈良時代の寺院の典型的なものです。この様に国分寺と尼寺の型式が異なるのは、全国的に見てもあまり例がなく他に下総国分寺があります。
- ③**薬師寺** 国分寺建立と同時に発令されました。本尊は瑠璃光如来（薬師仏の別名）、日光・月光両菩薩、12神将（十二神将は、薬師如来の十二の大願に応じて、それぞれが昼夜の十二の時、十二の月、または十二の方角を守るという）で、現在のものは室町時代の作といわれています。
- ④**八幡宮** 相模国分寺鎮護のために勧請されたもの。現在他社と合併され弥生神社と称されています。
- ⑤**湧河寺**（現：清水寺公園） 薬師如来と同時に観世音菩薩を安置することになり、この寺にまつりました。現在この寺は有りません。本尊は十一面観世音菩薩で、これは千数百年後の現在も清水寺に有ります。
- ⑥**條理制**（じょうりせい：条里制） 條理制度による口分田として大化改新後開発された水田が、海老名駅国分周辺の水田で大変古いものです。（図－1参照）
- ⑦**逆川**（さかさがわ）運河 奈良時代に築かれた運河で、水田の灌漑用水として、目久尻川の国分杉本あたりから分流して掘ったもので、上今泉あたりまで3 km位。河幅は約5 m、目久尻川と逆に北の方へ流れたので逆川の名があります。現在はドブになってしまっています。
- ⑧**国府跡** はっきりした証拠は有りませんが、国倉跡と思われる所から焼米が発見されており、元慶2年（878年）武相の大地震（推定M7.4）で伊勢原に移り後大磯へ移りました。大伴家持・在原業平達が国司に任命されています。
- ⑨**海老名氏** 村上源氏（村上天皇の子孫から出た源氏）で康平年間（1060年間：源四郎親季が相模守として在住し地名によって海老名氏を名乗った。下海老名氏・国分氏・本間氏・荻野氏・今泉氏等は一族です。鎌倉時代の海老名源八季定は吾妻鏡にも載っている武将でした。その後永享の乱（1438年鎌倉公方足利持氏が將軍職を望んで室町幕府に叛逆を謀った事件）で衰えました。有鹿神社の近くに居館跡に墓が4あります。
- ⑩**国分寺金堂跡**に建てて有る石碑は居館に使用したと言われる13枚の敷石の一枚です。
- ⑪**大樺** 周囲8 mあまり、樹齢1200年。
- ⑫**尼の泣水** 尼の悲恋物語、元禄11年（1698年）に薬師堂の住職法印隆がこの供養塔をたてた。
- ⑬**銅鏡** 現国分寺に有る銘には国分尼寺槌鐘と有るので尼寺に寄進したものと思われ、寄進者は源季頼で正応5年（1292年頃）。作者は物部国光です。
- ⑭**瓢塚古墳** 全長60.6 m、相模国造の墳墓と考えられている。すぐそばには四十坂と言う東海古道が通っている。
- ⑮**秋葉山古墳群** 相模横山丘陵の端に有り、中心学園の背後に有ります。前方後円墳2基、円墳1基が有り、瓢塚古墳より古い物です。
- ⑯**岩盤地蔵** 中心学園バス停のそばに有ります。元禄10年大地震（M7.2）元禄12年大暴風雨、元禄16年大地震（M8.2）、宝永4年富士山爆発、享保年間大飢饉、天然痘が流行したため、村境のこの地に地蔵をまつり災厄（さいやく）が村に入らない様にしたのが現在まで残っているのです。

M7.2、M8.2は神奈川県昭和2年11月発行「地震のはなし」より転載しました。

『青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今さかりなり』 小野朝臣老万葉集巻第3。表面は大変はなやかに見える天平時代も裏面は謀略・天変地変の大変な時代でした。

天平1年(729年)長屋王の変、藤原氏は謀略を用いて政敵長屋王を謀反として攻め、自殺させる。娘安宿媛(アスカベヒメ)を無理して臣下より聖武天皇の皇后にする。(天皇の配偲者は皇后・妃・夫人・嬪(ひん)・女・宮人等階級が有り、皇后と妃には内親王でなければなれなかった)。東北の蝦夷(えみし)、九州の隼人(はやと・はやひと)の不穏な動き有り、天平2年凶作・盗賊横行妖言(ようげん:凶事があるなどと言いふらす)あとをたたず、天平4年早魃(かんばつ)大飢饉、8月大暴風雨、12月大地震、天平5年早魃、天平6年大地震2回有り、天平7年天然痘が九州に発生、東に向う。天平8年、天平9年凶作。天然痘大流行、藤原氏の実力者4人死亡。天平12年藤原広嗣が九州で叛乱。

其の他新羅とは大変険悪な状態となり、北部の勃海国との関係をにらみながら遣唐使を派遣する等、内優外患交々来たる感で、聖武天皇も恭仁京(くにきょう)に遷都して国分寺建立の詔勅を出し佛(仏)の力で鎮めようとしたと思われま。

文化財見学 座間編

ハイキング、サイクリングでどうぞ

昭和55年11月3日

①相武台神社 祭神は日本武尊命(やまとたけるのみこと) 昭和7年、10戸たらずの人々によって創建された、境内に石塔2基有り。

- ・庚申塔 相武台前駅広場の南西に有った。
- ・回國(かいこく)供養塔 県道と立野台方面の分岐点にあった。辻々に立てられて昔の道しるべをかねていた。交通路は、相武台前駅前の横浜銀行の横を入りすぐの通りを左折、次の十字路を越してすぐ右側の小公園内にある。

②座間神社 日本武尊命。創建正和2年(1313年鎌倉幕府北條基時の頃)。明治9年までは、飯綱権現社(長野県の戸隠山のそばの飯綱山、鼠位の大きさの獣を使い祈とう、予言、呪術を行った)であった。境内には石祠がありいろいろな社がまつられている。神社下の手前にしめ縄を張った所は、戦前は清水が湧出していたが、戦時中上部の松林が、松根油(しょうこんゆ:航空用ガソリンの代替として試みたが、実用にはならなかった)をとるため切られてしまった、以後、水は出なくなった。(宮司の話による)

ここでは相模野台地の上段河岸段丘を示す礫層が見られます。落ちていた椎(しい)の実などを拾って上の公園の猿にやるのもよいでしょう。

【伝説】 悪い流行病で村民が非常に困っていた時、白衣の老人が来てすすめたので、飯綱権現を祀ったところ、その流行病が止み、村民は救われた。

交通路は、キャンプ先のトンネルを過ぎ、初めての十字路を右折150m位の所。

③宗仲寺 創建は慶長8年（1603年、徳川家康の頃）。開山は家康と親しかった源栄（内藤清成に請われ宗仲寺の開山となる）で、入山記念と見られる“六字名号碑”が歴代住職の幕地の右側にある。元和4年（1618年、2代秀忠時代）座間では最古の石造物。

東京の新宿のもとを開いた内藤清成が、両親の隠居所とした。相州東部で5千石を所領した、清成は新戸に陣屋をつくり、現在陣屋稲荷という小祠があり、附近を陣屋小路といっている。

交通路は、キャンプトンネルを出て直進、坂を下り右折、真っ直ぐ行った左側。

④大日如来座像 天和3年（1683年、5代將軍綱吉時代）、風雅、温和で気品あり、最もととのっている。相州鎌倉郡座間郷と刻まれている。大日如来は密教の教主。宇宙の実相を体現する根本仏。

交通路は座間神社と反対に左折、始めての十字路を右折、右側二階屋根の家の露地の奥。

⑤関東ローム層 洪積世(こうせきせい)末期数万年より、1万年で1.5 m位の割合で堆積したと推定されています。箱根火山（約40万年前に活動開始し始めた）の灰と、古富士山（数万年前活動開始）の灰です。箱根系は明かるい黄色で、富士山系は暗い色をしています。

交通路は、大日如来座像と反対に、十字路を右折、突当り、座間公園西門内の眼の前の崖。

⑥番神(ばんじん)堂 番神とは三十番神の略称で、毎日交替で国家や国民などを守護するとされた30柱の神々のこと。この場所にはキャンプの崖下より湧水しています。この水は左折して静かな屋敷町を流れて行きます。羽目板等、昔風の家が多いです。

交通路は、公園西門を出てすぐ左折（この角に石塔あり）、道がY字状に分かれるが左の山寄りを行く、しっとりとした山道である。突当りに小祠がある。その後です。

⑦護王姫祠 大櫓 鎌倉古道。創建は不明なるも、座間伝説によれば、源義経の妻護王姫(ごおうひめ)が、平泉に逃れた夫の跡を追って、ここで難産の為死亡。村人が哀れに思い墓標の代りに櫓を植えた。その後、弘安5年（1282年北条時宗の時代）円教寺（番神堂の南、すぐそば）の住職の夢枕に立って「近く高層が来るから墓前で読経して貰って下さい。そしたら今後難産で苦しむ人がいないようにしてあげます」と告げました。2、3日して、日蓮上人が円教寺に宿泊しましたので、この話をして、読経してもらいました。以後、安産の神として、今でも10月17日の縁日には安産の護符(ごふ：お守り)が頒分(はんぶん：広く配る)されています。

『海老名伝説』によると、永享10年(1438)鎌倉公方足利持氏が室町幕府足利義教（別名くじ引將軍、くじ引きで將軍になった）にそむき敗れる。海老名の今泉氏は鎌倉に味方した為衰えた。その後、与党の一色伊号守六郎は永享12年(1440)に再挙を図ったが失敗（結城合戦）。その妻護王姫は逃げる途中産気づき赤子を産み落とした。その地は今も産川として残り、産川橋があり、下流の橋を赤子橋と名づけた。赤子橋は現在ありません、姫はその後、座間入谷まで落ちのび落命しました。そこが今の所と伝えられています。鎌倉古道はここより北方100m、はっきり分かりません。

交通路は、キャンプの手前バイパス道路を行き横断歩橋の手前に大きな木が見えます。

⑧龍源院(りょうげんいん) 山号は水上山。寺号はありません。創建は永享年間(1429~1441年:護王姫時代)始めは富士山公園の西麓に有りましたが、弘治年間(1555~1558年:川中島の戦と桶狭間の戦の中間時代)現在地に移した。

伝説によると、渋谷高間が小桜姫を生んだ妻に死なれ、後妻と小柳姫をもうけたが、諸国巡礼に出た。その間に後妻は小桜姫を殺して湿地に埋めた。小柳姫はこれを知り、そばの沼地に投身自殺、後妻は悪事がばれて村人に殺された。巡礼から帰った高間はこの事を知り、僧となり、屋敷を寺にして3人の菩提を弔った。これが龍源院である。小桜姫を埋めた所は現在でも桜田の地名として残り、最近まで桜、どろ柳(別名「ドロノキ」ポプラ属)が墓標としてあったが今はない。座間高校の西方で桜田団地がある。この寺に弁天様があります。墓地の奥で山裾から清水が湧出しています。山深い静かな所です。

交通路は座間市役所と鈴鹿神社の間の道を北へ約100m行くと参道入口。

⑨鈴鹿神社 伊邪那伎命(いざなぎのみこと)、素戔鳴尊(すさのをのみこと)、創建不明なるも弘治2年(1556年)再建の棟札あり。古くから座間郷(磯部、新戸を含む)の総鎮中。左手池のそばに斉藤昌三(書誌学者、鈴鹿生まれ昭和35年没)の句碑があります。

『赤まんま 鎌倉古道 ここに絶え』

伝説によれば三重県の鈴鹿神社のみこしが流れつき祀ったとされています。欽明天皇(580年代)の話です。当時、相模川沿いは奥深くまで入海でした。

鎌倉古道は神社の裏手を通っていましたが、今は形が崩れ、はっきりしません。

交通路は座間市役所東前。

⑩心岩寺 山号は座間山。文安年間(1444~49)座間西中学校附近にあったが、洪水で流失、現在地に移った。

本堂の後ろの真中辺りの墓地に岩城常隆(安土桃山時代の武将・大名、享年24)の供養五輪塔がある。彼は小田原攻城中の豊臣秀吉に服従を申出てゆるされ、帰途この地で急死されたのである。福島県平の12万8千石の大名だった。

交通路は護王姫祠の所を通りすぎ、坂をおり切った所の横断橋の手前を左折してすぐ左側。

⑪梨の木坂横穴1号、2号 1200年~1300年位前のもの。入口の前面に玉石を積んだのは座間地方の特色である。内部は人が立てる高さ、奥行7.6m。出土品は硝子玉の首かざり、金のイヤリング、長頸瓶(ちょうけいへい:長い頸(首)の瓶)等。

交通路は心岩寺前を左へ直進、坂をのぼりきる手前に歩道の所に小さな鉄門あり、その横より入る。内部見学は教育委員会の許可が必要。

⑫星の谷観音、星谷寺 創建は平安中期。坂東33ヶ所第8番の札所。

巡礼歌 『障りなす 迷いの雲をふき払い 月もろともに拝む星の谷』

七不思議 ①撞座一つの梵鐘 ②紅白咲分の椿 ③観音草、境内にしか生えない。中風に効く

④星の井戸、日中でも星が見える。庫裡の裏手 ⑤不断桜、開花期が不安定

⑥楠の化石、振ると音がする ⑦乳房のある楓の根枯木

梵鐘は近江源氏、佐々木信綱寄進。嘉禄3年(1227年)で撞座が一つしかないのは珍らしく、また古い事では日本で50番目、関東では2番目に古い。

宝きょう印塔 建立は宝歴13年(1763年)美しくて壮大、高さ5.52m、これも鎌倉郡座間郷と正面右側に刻まれている。

【伝説】奈良時代、僧行基が本堂山(これより北東約400m)に来た時、小祠があったので、40cm位の聖観音像を造り本尊とした。その後怪火があり、堂は焼けたが本尊は猛火を抜けて南へ向って飛び出し、杉の枯枝に光明を放ちながら止った。住職の理源は霊地を南に求めて現在地に再建した。

交通路は座間駅下車、踏切を渡り右折、約400m直進突当り。

⑬青面金剛庚申塔 建立は明和5年(1768年)。像と文字を刻んであるのは座間ではこれ一つである。傍の道を登って行くと頂上(三峰山)に御堂あり、神体は30cm位の丸石であった。

交通路は星谷寺の前通りを、すぐ小田急の踏切を渡り、坂を登りきって約100m位行くと左手の小高い所にある。見落すおそれあり、注意。

⑭地藏尊、道祖神、馬頭観世音等の石牌 交通路は前述の踏切を渡ってすぐ左折、直進、坂をおりると辻々に右や左に点左する。入谷の中谷戸地点。

⑮崇福寺 道祖神。六字名号碑。秋葉山献燈。出羽三山。創建、応永20年(1413年)門前に幼児を抱えた地藏尊あり。一説にはキリシタン地藏ではないかと言う。

交通路は座間中学校前をすぎて左折するとしばらくして坂となり、谷道に行く。木がしげり、静かな道突当りの左手が寺である。石塔群は右折してすぐ牛小舎のそばにある。

⑯地神塔 建立嘉永6年(1853年)土地にも神様がいます。地鎮祭もそのためのものです。座間市には現在3基しかありません。

交通路は相武合前駅①番の長後、大塚行のバスの上小池バス停の山よりの細道の人口にあります。

⑰諏訪明神。道祖神。庚申塔。富士講碑。 建御名方命(たけみなかたのみこと)。創建は慶長7年(1602年)。境内右奥に神変大菩薩碑があります。役の小角が寛政11年(1799)、天皇から賜った称号です。

交通路は座間小学校前信号のある所を西へ道なりに行き相模線の踏切を渡り、直進右手の森の中に有ります。

⑱栗原神社 豊日霊命、天之御柱命、国之御柱命、若日留女命 創建不明なるも宝永3年(1706年)再建の記録あり。明治6年に絹張明神(小池) 握財(阿久山) 権見(上栗原) 若宮権現(中栗原) 竜蔵権現(下栗原)を現在地にあった王子権現社(国狭槌命)に合併して栗原村の鎮守としたものです。

この辺は1300年位前から村が成立しましたが、江戸時代始めでも100戸足らず、昭和の始でも

300位でした。

境内にはシラカシの大木があります。高さ20m、目通り4mの大杉がありましたが、昭和46年に枯れてしまい、根本から切りました。今もその巨大さをしのばせています。社の右側です。

交通路は座間中学校前の通りを道なりに直進大和厚木パイパス高架の手前です。

(後記) 手軽に行ける所だけ書きました、個人所有の文化財、見学手続のいる所等は省きました。大体相武台前駅を中心として半径2km位をめどにしています。

◎参考資料 『市内文化財散歩』 座間市教育委員会発行
『神奈川県地学のガイド』 コロナ社発行

◎実地踏査

宮原 晟二郎

地名「相武台」の由来

久保田 浩子

昭和12年12月20日、天皇が陸軍士官学校第50期生徒卒業式に行幸したとき、学校の所在地を「相武台」と命名しました、キャンプ座間の正門入口内右手に杉山大将の筆になる陸軍士官学校相武台記念碑が立っています。その碑には「相模ハ古ク佐賀牟ト訓シ古事記日本武尊東征ノ條ニ相模国ニ作ル台ハ其ノ景勝ヲ占メ相模原ヲ控ヘ最モ武ヲ練リ鋭ヲ養フニ適ス乃チ武ヲ相(み)ルノ意ヲ寓シ給ヒタルモノト拜ス」とあり、昭和14年8月20日に建立されました。

終戦により、米軍に破壊されるのをおそれて台上から撤去し地中に埋められた碑は、やがて米軍がそれを知り、第八軍指令官アイケルパーカー中将の命令で「由緒ある碑だから」と元の台座にもどし今日に至っています。

いまでこそ「相武台」の名称は駅名や町名に使われていますが、当時は民間人が、おいそれとその名を口にすることは出来ませんでした。昭和14年5月12日東京日日新聞社が主催して開いた「相模原軍都建設座談会」に次の一コマがあります。

久保田新磯村長 甚(はなはだ)畏(おそれおおい)ことだが「相武台」というご名称は一般に用いてよろしいか。

井田少佐(陸軍士官学校) 「相武台」の名称は士官学校に賜ったので他に使うことは絶体に許されない。

岩本信行相模原開発同盟会長 「相武」だけならさしつかえないか。

野坂相如県都市計画課長 「相武」なら「相武〇〇会社」というのもあることだし、いのではないか。

中島麻溝村助役 相模原が一躍市に変わるのだから、「相模市」はどうか。

井上相原村長 私は当りさわりのない「相模原市」がいちばんよいと思う。

しかし、小田急線の駅名は昭和16年1月1日に相武台前と改められました。

因みに昭和2年2月1日に小田急線が東京の新宿から小田原まで開通しましたが、開業時は座間駅と

いい、次いで昭和12年6月1日に東京の市ヶ谷から陸土が移転するにともない。士官学校前駅となりました。駅舎は座間市に所在し駅付近には現在、相模原、座間両市にまたがって同名の「相武台」町が存在するので土地不案内の人は、しばしば間違えることもあります。

軍国主義華やかな時代には駅前広場の桜の木に馬をつないで待つ兵士の姿が見られました。相武台前駅前を通る県道、町田＝厚木線は、この天皇行幸のため住民が奉仕して整えられた道路で、以来“行幸道路”とよばれ奉仕記念碑が立っています。

同じ頃、相武台下駅が生まれています。これは昭和6年開通の相模線 茅ヶ崎～橋本間の座間新戸駅が改名されたもので、相模原市新戸に所在し、相武台前駅との間をバスで、現在も連絡しています。

原始時代から人々は川の近くや水の便の良いところで生活してきたので、“八里橋無し”といわれ、川の無い相模野の一隅の相武台地区は江戸時代までは山林や原野ばかりで誰も住んでいませんでした。一面すすきの原で雑草にまじって“さいこ草”が生えていました。「かや野」とか「さいこが原」といい、周辺の村落の入会野でした、雑草は家畜のえさに、すすきは屋根の材料として使われ、さいこの根は薬草なるので、これら収穫の一部は村の「野年貢」として“おおやけ”に納められました。時には加賀百万石の大名、前田侯の鷹狩りが行われたりしました。後に陸土の練兵場となった今の北里大学、県立相模原公園、国立相模原病院一带に及ぶ509万平方メートルという広大な土地は、江戸時代以降始まったかや野の開墾により、新磯村（明治22年新戸・磯部両村が合併）、麻溝村（同当麻・下溝両村）の畑地になりました。水の便はなく住家からも遠く米も採れない痩せ地でしたが、村人にとっては雑穀やさつま芋、養蚕の桑など作る大切な収入源でした。昭和11年11月、軍の命によりこれらの土地が買上げられたわけです。価格は士官学校用地が1反500円、練兵場が1反200円～230円でした。

昭和20年8月、日本が第二次世界大戦に敗れ、同年9月、士官学校は座間キャンプとなり、アメリカ軍が続々施設に移り住んで来ました。相武台前駅の周辺は、日本人の入ることのできない横文字の看板を掲げる店で賑わう一方、練兵場は農業用地として開放されました。「相武台」の名称も次第に一般に使用され、昭和29年相模原町に市制が施行され、かつて、原野→練兵場→畑地→住宅地と、幾多の変遷を経た相武台地区は昭和45年に相武台出張所が出来て、相武台、相武合団地、新磯野の町名で構成されました。現在は中層建築が並び、人口密度が市内で最も高いとか。明るいベットタウンの趣きがただよい、それなりの風格すら感じられるこの頃です。

ルーツを辿って行くと相武台に関りのある先住の人々のくらしの跡を、近隣に数多く見ることができます。縄文時代中期の集落：勝坂遺跡（昭和49年史跡に指定）、古墳時代の勝坂有鹿谷（かつさかあるかやと）祭祀遺跡。その他室町時代、戦国、安土桃山時代のものなど地志や道路名と共に今に伝えられ民俗行事や民話など興味は尽きませんが次の機会にゆずります。この文は次の資料を参考にしました。

- * 相武台公民館歴史講座資料
- * 椿書院「小田急線各駅停車」
- * 相武台小学校「私たちの郷土史」
- * 1980年4月15日朝日新聞記事
- * 久保田忠雄氏の談話

(以上) 自然と文化第4号寄稿文より

昭和57年

相武台歴史同好会記録

自 昭和57. 1. 1

至 昭和57.12.31

◎年度の予定

*歴史講座を聞く

講師 市立図書館古文書室 金井利平先生

*同好会としての研究発表

*史跡散策

ことしの足あと

年 月 日	内 容
57.1.11	歴史講座 鳩川農学校創立と変遷 講師 金井利平先生 活動計画 本年度の活動計画について 新入会員の紹介
2.13	歴史講座 上溝市場の盛衰と相模原の農村の移り変り (1)
4.13	歴史講座 県内市場の状況 小作慣行農村の移り変り
4.22	絹の道 絹の道散策、参加者：会長以下7名 散策実行 天候に恵まれ大変楽しい一日でした
5.8	歴史講座 相模原に於ける宗教活動 住民の等級 日本の宗教
6.16	石佛めぐり 公民館共催 参加会員7名 一般者も参加 天候にも恵まれ大変有意義な散策の一日でした
7.10	歴史講座 相模原の歴史と石佛
8月	夏休み
9.11	歴史講座 佛教伝来、奈良時代の佛教文化。法隆寺 小野妹子。 大化の改新と三韓。
9.27	歴史散策 秋の足柄緯歴史散策、足柄峠、地藏堂、万葉公園その他 参加者10名。天候に恵まれた1日でした。
10.12	歴史講座 佛教の発達とその移り変り 話し合い 市民文化財産の作品について話し合う。
10.12~28	文化財の作品製作 文化財展示作品製作 文集写真展示用パネル等
10.18	文化財展 準備委員会に代表出席 (3回) 準備委員会 冊子原稿提出

11.4 文化財展の準備 冊子の製本と会場展示のため3名出席(市民会館)

11.5~7 市民文化財展 市民文化祭に「相模原の石佛めぐり」パネル展示冊子写真
作品展示 ガイド

11.19 歴史講座 佛教文化の発達と佛像
彫刻文化 佛像の名称

12.11 反省会 一年間の反省と次年度への展望

まとめ

本年は文化財展への参加もあり、会としても大変盛り上りのあった1年であった。会員相互の親睦も増し来年度もますます我が郷土相武台のルーツを求めて頑張りたい。歴史語座、文化財展、歴史数策等、よい企画を考えていきたい。

<絹の道>ハイキング

昭和57年4月22日

幕末から明治初年にかけて、信州・甲州・関東南部山麓地帯から、横浜に向けて、輸出品の生糸が大量に運ばれた道で、現在もわずかだが、往時の面影が鎌水に残っています。

参加者会長以下7名、傘持参の雨の中の出発も目的地到着とともに晴れとなり楽しい1日でした。

○コース 相武台前駅 → 町田駅(国鉄) → 橋本駅 → 鎌水(歩き) → 公会堂 → 石垣 → 石塔
→ 道了堂 → 公会堂 → 永泉寺 → 小泉家 → 永林寺 → 鎌水(バス) → 橋本駅

①絹の道道標

表面「八王子」西片面「此の方はしもと、大山、津久井」東片面「此の方はら町田、神奈川ふじさわ」
裏面、「慶応元年己丑仲秋吉日」武州多摩郡鎌水村

②石垣のお大尽 八木下要右衛門屋敷跡

ペリーが浦賀に来る2年前、異人館を建てた(嘉永4年、1851年)石垣の石は、相模川より選ばせたと言う。

③石碑

江戸期の庚申塔・秋葉大権見、西国、四国、秩父、坂東供養塔。

④絹の道碑

表面「絹の道」、側面「昭和三十三年建立、日本蚕糸業史蹟鎌水 人記念東京多摩有志、台石には繭(まゆ)、糸まき、桑の葉が彫ってある。

⑤道了堂 永泉寺別院大塚山(213.7m) 大学寺

明治7年渡辺大淳(元永泉寺住職)が小田原大雄山最乗寺道了堂(道了尊は、師である了庵慧明禪師が75歳でこの世を去ると、寺を永久に護るために天狗の姿に化身して舞い上がり、山中深くに飛び去ったといわれ、以来、寺の守護神として祀られている。)の分霊(ぶんれい：祭神の霊を分け)を祀った。

内妻浅井貞心尼は浅草の出で、道了堂を盛り上げ、明治26年出版の「武蔵国南多摩郡由木村鐘水大塚山道了堂境内之図」には桜満開の中、人力車上の丸髪の人、ステッキの紳士等参詣人で大賑わい、本堂の他に、子守堂、庫裡書院等あり、繁盛した。戦争中、武運長久を祈る出征兵士で賑わったが、戦後はさびれ、ハイカー相手の売店となり、38年、後を継いだ姪のとしが強盗に殺され無人の堂は荒されて、現在廃屋が残るのみ。

⑥永泉寺

弘治年間(1555年頃)武田家の老臣永野和泉が観音像をまつり庵を結んだ。徳川將軍三代家光より御朱印十石を受けていた。明治17年火事の為薬師堂だけ残った。現在の建物は、石垣大尽八木下要右衛門の家を移築したものです。境内には、芭蕉堂や句碑、投込墓地、鐘水峠で殺された商人の墓、大塚家の後妻となった東京三井家の娘於加津の墓等もある。

⑦小泉家家敷

板木谷戸にあり、入母屋造り、大きな三角破風を持つ。多摩地方独得な家構、畑、前庭、土蔵(格子に昔泥棒に鋸で引かれた跡あり)。納屋、堆肥小屋、稲荷神社、胞衣塚、湧水等、自給自足の典型的養蚕農家、当主小泉栄一氏は、郷土史家

⑧永林寺

山内上杉の老臣で滝山城主大石定久の居館であったが、天文元年(1532年)叔父の長純和尚を開山として開いた。

上杉家が北條氏康の河越城の夜襲で敗れてから北條に降参し、氏康の次男氏照を養子にむかえる。家督を氏照にゆずり、後世をかなしみ自殺した。野猿峠にあった墓を当寺に移す。七堂伽藍は、天文15年(1546年)氏照によって完成、現在の建物は江戸後期に再建されたもの。三重の塔は最近建てられた。惣門、三門、中雀門は徳川家から与えられたもの。氏照の夫人は大石定久の長女で、その娘は下溝の天応院の貞心尼(ていしんに)である。相武台地区は大石氏の領地から北條氏の領地が変わった。

【民話 嫁入り谷戸】

永泉寺近くの田に夜になると鈴の音が聞え、美しい巫子(いちこ：神前で神楽を奏する舞い姫)が白い衣に緋の袴をひらめかせて舞踊った。村人は魔性の者とうたがい矢で射ることにした。豊年の年の祭りの時、御幣を手にした例の巫子が舞始めた時、矢か巫子の胸を射た。巫子はその場から消えた。翌朝村人を見ると、田の神を祀った所で年老いた白狐が胸を射抜かれて死んでいた。弓を引いた所を弓射り谷戸と言ったが、後に明るい名前の嫁入り谷戸と言う様になった。

神戸の沢

一方死んだ狐を村人は、祟りを恐れて手厚く葬り、塚を築いた。神戸塚と呼びその辺りを神戸の沢と

言う様になった。

(以上)

史跡めぐり事はじめ

宮原 最二郎

相武台団地が出来たばかりの頃、勝坂式土器の事を初めて知り、それがキャンプの向う側から出土したとの事、案外近いし有名ですから、立札ぐらい有るだろうと出かけましたが、無人部落のように静かで人に出会わず、ついに探すことが出来ずに帰って来ました。

しかし、勝坂部落には寺、神社、長屋門等有り、古い所だなと思いました。

これが私の、相模原史跡めぐりの、実に記念すべき第一歩でした。

大山街道石仏散歩について

- ・とき 昭和57年6月16日(水)
- ・講師 市立図書館古文書室 金井利平先生
- ・コース ①能徳寺の如意輪観音 ②天応院のお化け石塔 ③雨乞地蔵 ④夫恋地蔵 ⑤塩田の舟乗り地蔵 ⑥望地の二十六夜塔 ⑦芋っ葉灯籠 ⑧田名の陽石 ⑨亀の甲まつり ⑩お姫の森石室 ⑪上大島のいぼとり地蔵 ⑫大矢平次左衛門の墓 ⑬九沢の子守地蔵 ⑭塚場の子育て地蔵 ⑮大山不動明王の道標 ⑯三増合戦の落人の供養塔 ⑰岩倉の手玉石、

①能徳寺の如意輪観音

造像年代は安政17年(1860)庚申正月十九日とある。造った目的は、健康長寿を願う庚申侍(こうしんまち：庚申の日に神仏を祀って徹夜をする行事)と共に十九夜塔(女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音(多くは画像)の前で経や和讃を唱え、飲食する講)のことも考えられ、女人講すなわち安産の祈り、育児、婦人病の祈願である。

②天応院のお化け石塔

下溝の天応院の暮地に、斜めにきれいに切られた無縫塔が二基あり、次のような言い伝えがある。

昔、この寺に一人の侍が泊っていた。ある日の夕方、庫裡から外を見ていると怪しげな姿がふわりとふわりと墓地の方へ行く。「怪しい奴、待て」と追いかけて、後から袈裟がけにスバツと切りおろした。手ごたえあって怪しげな姿は消え失せ、後に石塔が直二つになっていた。

③雨乞地蔵

日照りが続き、畑作の陸稲などが枯死しそうになると、雨乞い行事が行なわれた。この行事の主役が地蔵で、当日は村人総出で地蔵前に集まり、道保川へこの地蔵を沈め神官が祈願ののりとを奏した。

④夫恋地藏

当麻地区市場の北に通称「お花ヶ谷戸」と呼ばれる所がある。一遍上人の姿に一目惚れしたお花という十八、九の娘が、ここに庵を作り朝夕読経しながら一遍上人を恋い慕い続け、ここで一生を終えたという。

このお花の供養にと、昭和46年夏一体の座像の地藏尊が建立され、夫恋地藏と命名された。

⑤塩田の船乗り地藏

昔は塩田地先の岩切り前が相模川の大山街道の渡船場で、津久井の関から木炭や薪を船で運び、丸太の材は筏にして相模川を流して来た。津久井から塩田の先まで来た品物は船や筏で厚木方面や相模川河口の須賀まで下り、一部は当麻の宿から近くの村々へ運ばれた。

船乗り地藏は、この仕事にたずさわった船頭や筏師たちの信仰に守られてきた。

⑥望地の二十六夜塔

二十六夜の月とともに、阿弥陀・観音・勢至の三尊がやって来ると言われ、豊年や商売繁盛を願って建てられた。

⑦芋っ葉灯籠

田名半在家の森の奥に祠がまっあってある。この祠のわきに灯籠があり、昔秋祭りの最中に突然降り出した雨で消えそうになった灯籠の火を里芋の葉で守ったことから、雨が降っても降らなくても秋祭りのときは、芋の葉を灯籠にかぶせる習わしになった。

⑧田名の陽石(ようせき：男根の形の石)

この巨大な陽石はもとは城坂の中服路傍にあって、眼下の弦歌さんざめ 水郷田名の花街を一望におさめる位置にあった。花街の芸妓たちの信仰の的で朝夕客が多いようにと参詣した。また、子宝に恵れない女は夜ひそかに陽石の亀頭を撫でまわし妊娠を祈願した。

⑨亀の甲まつり 省略

⑩お姫の森の石室

昔、ひとりのお姫様が敵に追われて逃げてきた。しかし敵に追いつかれ殺されてしまった。雨に漏れた遺体を見つけた村人は、哀れに思って近くに埋葬し、火を焚いて姫の霊を慰めた。すると作物も育だたなかったほどの長雨がカラッと晴れて、待ち望んでいた太陽が照り始めた。村人はそこに祠を建て、長雨続きで困ったときは、祠の前で「お焚き上げ」を行ない、お天気になるよう祈った。

⑪上大島のいぼとり地藏

その昔、ここには一抱えもある榎(えのき)の大木が青々と繁っていた。この地藏にお願いするといぼ

がとれるという近郷の評判になった。

⑫大矢平治左衛門の墓

天正18年(1590)豊臣秀吉小田原攻めの際、平次左衛門は内藤景豊の家来で津久井城を守る武将であった。しかし落城し、平治左衛門は家来数名をつれて夜陰にまぎれ城を去り、百姓となって土着した。現在の矢家一族はその後裔であると伝えられる。

⑬丸沢の子守地蔵

建材業の伊藤正さんの家敷に子守観音がある。昭和のはじめ頃、子守りに赤ん坊を預けていたが、庭隅の古井戸に落ちて二人とも死んでしまった。二人の菩提を弔うため庭の隅に観音様を建立し供養した。

⑭塚場の子育て地蔵

昔は病気になっても医者にかかる余裕がなく、もっぱら神仏の信仰に頼っていた。この地蔵は多勢の子どもを救ったので、いつの間にか子育て地蔵と呼ばれるようになった。

⑮大山不動明王の道標

八王子 → 橋本 → 上溝 → 当麻 → 厚木を経て大山参詣に向かう人々を田名に立ち寄らせる方法として、大山への近道を知らせるために建てた道しるべ。小山浅次郎宅内に当時と変わらぬ場所に建っている。

⑯三増合戦の落人の供養塔

永禄十二年(1569)十月、武田氏と北条氏が戦い、敗れた北条方は北条氏照の居城を目指して津久井から相模原に落ちて来た。傷ついた北条の落人たちは瀧山城(八王子市高月町)と反対に来てしまったことを知り、力尽き数十人が自刃して果てたという。

この供養塔は明治31年橋本の人々により建立された。

⑰岩倉の手玉石

上溝四ツ谷の十王堂にある大石。250年前に岩倉という力持ちの力士が力を試すのに使ったものだという。

参加者の感想文

★石仏めぐりに参加して 大銅桂子

よく晴れた日、能徳寺の如意輪観音をはじめ、17ヶ所の石仏をたずねた。日頃せかせかとした生活を過している私は、道端にそっとたたずみ微笑んでいらっしゃるお地蔵様や、もう形も風化されたような石仏にゆっくり目をやる事もなかった。一日それぞれのお地蔵様の姿や顔をながめているうち、又、それらにまつわる話を聞くうち、昔の人々の素朴な人柄や信仰がうかがわれて心が和む。子供の無事を祈り、成長を願う親心と共に、大切にしたいものである。

★お姫の森の石室 谷口千鶴子

相模原に来て早いものでもう8年になる。子どもら達にとっては第二のふるさとなるであろう相模原を、もっと知りたいと入った会であったが、すてきな仲間めぐり合い、勉強会に山行きにと、楽しい思い出を重ねている。

この夏行なわれた、大山街道石仏散歩は、金井先生のていねいなご説明もあって、わか相模原への、想いを更に深めることが出来た。

数多くの石仏の中で特に印象に残るのは、お姫さまの森の石室にまつわる悲しい昔語である。戦国の頃のことだったろうか、烈しい戦いの後、数十人のお供の武士とともに胸を槍で一突きされて息絶えたという美しいお姫様、それを葬った村人達によって建てられたという。明かるい草地の木の陰に、ひっそりと苔むす石の祠をじっと見つめていると、美しかったというお姫様の横顔が眼前に浮かび、時の流れを越えてそのあわれさが胸に迫ってくる。

★大山街道石仏散歩に参加して 野口章恵

この度、数々の供養塔、道祖神等に出逢うことが出来、楽しい一日を過しました。

子を思う親心、お地藏さんの顔もほほえましく、眺める方も心なごむ「塩田の船乗り地藏」

住宅の庭の奥に残された、大山近道を教える道しるべ。大山参詣の人達がこれを見ながら登って行ったことでしょう。たまたま出て来られたおばあ様の「大切に保存している」と語っていらしたその言葉から、土地の人々に語りつがれ親しまれて来たことを知りました。何かと殺伐とした現代にロマンを与えてくれました。

資料によると市内には900もの石仏があることを知って、古来の人々の信仰心の深さと、現代までそれを守って来た地域の人々の気持ちを考えて、歴史の重さ、そこに残されている教訓の数々、おもしろさ等がしのべれます。今後も機会を得て、残された石仏たちとの対面を実現させたいと願っています。

★石仏めぐり 後藤きく子

最初に心を魅かれたのは、天応院のお化け石だった、私は内心好奇心をそそられていた。境内の低い土手に、雑草の中に幾株かのつりがね草が今を盛りと咲いていた。子どもの頃をなつかしみながら曲角を進んで行く、大きな木々に囲まれた静かな佇まいの寺院があり、その横に代々の住職の仏塔がお化け石塔と聞かされた。その昔の言い伝えは略すが、よく考えれば怖い不思議な伝説のあるお寺だった。

また、心に残るのは、夫恋地藏である。当麻山の修業僧一編上人を恋慕い続け、この地で一生を終わったお花の一途な女心であった。お地藏様のまつってある場所は、今はあまりにも似つかわしくないのも、もっとふさわしい場所に移してあげたら最高ではないかと思う。

九沢の子守地藏も小さな子守観音様だった。いつまでも消えてしまわないよう子ども達の事故を守って欲しいものです。

★大山街道石仏散歩に参加して 山崎弥生

西洋の諺に「親類には遠く、水には近く住むがいい」というのがあるそうだが昔の人々が水近くに住んだということは、想像に難くない。

わか相模原の歴史も、水辺にその繁栄があり、庶民の哀歓も、水の流れに多くその影を落している。樹々の緑にも清流にも、程遠い地域に住む私達の、石仏めぐりの行程にはそうした意味での、さまざまの感慨があり、時代の変遷への深い思いがあった。

武将達の栄枯盛衰と、庶民の諦観(ていかん：あきらめ)。戦いや生活に疲れた人々に安らぎと、魂の救済と、来世への希望を与えたつかの幾つかの信仰のぬくもり。

一切衆生(いっさいしゅじょう：生きとし生けるもの)の願望を満たし、苦を救うという如意輪観音のお姿。無仏の世界に往して六道の衆生を化導(けどう：教化し導く)するという地藏の温顔。

そういう石仏も、今は交通の激しい幹線道路の傍に位置したり、一顧(いっこ)だにされない有様になってゆくのは残念である。

歴史は、我々にいろいろのことを教えてくれる。いつか私達は、もっともっと深い心で、こうした石仏に直面することが、あるかもしれない。

人生の旅に行き暮れた、そのときに……。

足柄峠歴史散歩 <秋の足柄古道を行く>

昭和57年9月27日

かつての古東海道筋にあたった足柄路。会長以下10名参加、台風通過後の荒廃した路を強行突破。ハイキングは快晴のもと、秋の楽しい一日でした。

○コース 相武台前駅 → 新松田駅 → 御殿場線足柄駅 歩き → 足柄峠 → 万葉公園
→ 地藏堂 バス → 関本 バス → 新松田駅

①御殿場線

1889年(明治22年)開通。1934年(昭和9年)丹那トンネルが開通するまでの東海道本線で、SLを後につけて登った。トンネルの多い所です。

②笛吹塚

1087年、後三年の役(陸奥・出羽を舞台とした戦役)の時、八幡太郎義家を助けるため、足柄に来た弟の新羅三郎義光が、やはり義光の後を追って来た豊原時秋に笙(しょう)の笛の極意を授けた所。

③足柄城

室町時代小田原北條によってつくられたが、秀吉の小田原攻の時、徳川家康によって落城した。水の枯れない池、カラ堀があります。

④足柄山

足柄山と言う単独の山はありません。矢倉岳(別名たけのこし)、足柄峠、金時山、明神岳、箱根の山々を一つにして呼んでいました。

⑤足柄峠

奈良、平安時代の官道で、802年(延暦21年)富士山の噴火で一時廃道(5月19日から翌年の5

月8日までの1年)となり、また復活した。万葉集、文学書、史書等で昔から知られた峠です。

⑥足柄関所

平安時代899年(菅原道真が右大臣になった年)手形を持って通行する事とおふれが出ました。

⑦聖天堂

本尊は大聖歡喜双尊天(男女の仏のだけきあっているもの)石像1.8m。風紀上都におけないと空船にのせて海に流したのが相模国の早川につき弘法大師がここに勧請したと云える。紋所(もんどころ:家紋)は交差した大根で、男女和合、子孫商売繁昌、縁結びを表わす。

⑧万葉広場

矢倉岳の登山口にある。根府川石(ねぶかわいし:小田原市根府川に産出)の碑に万葉集、その他の足柄に関する歌が刻まれています。その内代表的なもの

イ) 手向して 心ゆるすな 足柄の 関の山越え 荒きその道

ロ) 鳥総(とぶさ)たて 足柄山に 船木こり 木にをりいきつ あたら船木を

ハ) 足柄の 和乎可鶏山(矢倉岳の別名)の かづの木の わをかづさねも かづさかづとも

⑨地藏堂

名のとおりお地藏さんがまつてある。現在のものは鎌倉時代のもの。このあたりお正月には門松をたてず、檜(かし)の若木をたてます。昔お地藏さんが年始まいりで門松で眼をいためたから。江戸時代は旅宿が多く、大変さかえました。今でも富士屋、大黒屋などの屋号が残っています。

⑩関本

昔は坂本宿といい、延喜式によると馬22頭を置く、大変大きな宿場でした。

*足柄地方は、先土器、縄文、弥生、古墳時代等の遺跡が多数あります。

以上

相武台歴史同好会

宮原 最二郎

“私達の住む町のルーツを探り、ふるさとの歴史を残し、次代に伝えよう”これが私達の会の目的です。

昭和55年発足以来、各役員の熱意に支えられ、会員の熱心な探究心と和気あいあいの雰囲気の中、会も順調に育ちつつあります。

昭和57年度初めの活動予定としては、

①歴史講座を聴く 毎月1回

講師 市立図書館古文書室 金井利平先生

②同好会としての研究発表

③史跡めぐり、としました。

57年度の活動状況は次の通りです。

(以上) 自然と文化第4号寄稿文より

以下は「ことしの足あと」ページと同文の為省略。

相武台歴史同好会58年事業報

自 昭和58.1月至 昭和58.12月

会発足4年目を迎え、この1年間も内外ともに、活発な活動をすることが出来たと思います。私達の住む町のルーツを探り、ふるさとの歴史を残し、「次代に伝えよう」の目的も会員の熱意に支えられ達成されつつある事と喜んでいます。

58年 話上合い

1.22 ①新年度の事業計画について

②個人研究等のテーマについて

2.19 歴史講座 「天平文化の発展」講師 金井先生

3.12 古老に聞く 第1回相武台のルーツを探る。「戦中戦後の相武台」

講師 相武台在住の手塚シゲ様

4.6 史跡めぐり 「二俣川古戦場」早咲の桜を愛でつつ親睦を兼ねて実り多い山行 参加15名

4.16 歴史講座 「鎌倉時代の新佛教文化について」講師 金井利平先生

5.21 古老に聞く 第2回相武台のルーツを探る「大正時代の相武台について」

講師 新戸在住 安藤忠保氏

6.15 史跡めぐり 「町田相模原の鎌倉街道」(公民館主催) 講師金井利平先生

7.16 古老に聞く 第3回相武台のルーツを探る「陸士移転後の相武台と、終戦直後の相武台」

講師 相武台在住 瀬尾勇美子氏

9.17 打合せ会 相模原市文化財展出品作品についての打合せと冊子「相模原の自然と文化」原稿依頼の件

10.11 共同作業 文化財展出品作品制作打合せ会議と作品制作(於図書館)

10.15 共同作業 文化財展出品パネル作成(於永田氏宅)

11.3 出典 相模原市文化財展(大野南公民館)

6 講演会 相模原市文化財展記念講演会に参加 講師 千葉教育委員会 後藤和夫氏

11.19 歴史講座 「江戸時代田名における2つの越訴事件と一遍上人」について

講師 金井利平先生

4月~10月 参加 相模原市立博物館を考える会にに参加し、会長及び副会長会議に出席

10月、11月 参加 相模原市立博物館を考える会に講座開催される 会長以下講座に出席

歴史講座、史跡めぐり、相武台のルーツを探る。この3つを柱とした活動の他に、59年度は博物館を考える会等の対外的な会議にも積極的に参加するとともに、会員相互の親睦を計りつつ、会独自のテーマに取り組んでいけたらと願っています。

1984.1月 (谷口 記)

相武台のルーツを探る

古老に聞く (第1回)

時 昭和：58年3月12日 (土)

於 相武台公民館

講師 手塚 シゲさん (76歳) 相模原市相武台2丁目在住

お話のあらまし

シゲさんのご主人はゴルフ場の管理を仕事としていた。大正10年、保土ヶ谷ゴルフ場をはじめ各地を手がけたが、昭和23年、座間キャンプのゴルフ場の仕事をする事になり、相武台に移り住んだ。以来現在地に在住している。当時はガスも水道も電灯もなかった。横浜での便利な生活から急に変わったので大変だった。

電灯は隣家の鈴木さんと共同で私費で引いた。井戸を自宅に掘って使った。今でもいい水が湧いている。「水道の水より余程おいしいですよ、一度飲みにいっちゃい」とにこやかにおっしゃった。石油は厚木の専売公社の隣りの加藤さんまで買いに行った。

当時は店と言ったら駅前に瀬戸商店 (食料品) 飯島商店 (雑貨) と安斎 (書店) さんぐらいしかなかった。現在の城南信用金庫のあるところに安斎書唐があり飯島さんは元の場合に、瀬戸さんは現在瀬戸ビルになっている。家から相武台の駅まで見通しができ、駅前まで毎日買ものや用足しに行ったが、道が畑道で、雨が降るとぬかり、洋服を着たことが無いシゲさんでも、長靴を履かなければ歩けなかった。

今は無いが 当時は住まいの横からゴルフ場へ出入りができ、そこからシゲさんのご主人は仕事に通った。住まいの近くには砂利線が走っていた。相模川の砂利をトロッコで、旧陸士の中を横切り現相武台の駅の近くまでトロッコで運び出す線路であったが、ゴルフ場ができる時につぶされた。練兵場跡の広い畑の中に盛土された砂利線のあとがいつまでも残されていたが、今はあとかたも無い。

現在の4番ゴルフ場のところにお野立所の跡があった。お野立所は陛下がそこへお立ちになり、陸士生徒の観兵式をなさった所と聞いている。

*シゲさんは細面で、パーマをしない束髪に和服がピッタリ似合う、すらりと背の高い婦人だった。正座をして語る言葉のはしほしにサッパリした気性がうかがえた。現在は和裁を教えながら、昔の思い出話をするのが楽しみであるとか。 (以上)

史跡散歩

二俣川古戦場

横兵旭区内。ハイキング・サイクリングでどうぞ。

- ・時 昭和58年4月6日 午前9時集合
- ・集合場所 小田急相武台前駅改札口前
- ・持参するもの 弁当、水、旅費
- ・道 順相武台 海老名 → 相鉄 → 鶴ヶ峰

(資料)

相武台の近辺には、町田市の井出の沢の戦（南北朝黎明期、足利直義と北条時行が激突した合戦）、三増峠の合戦（武田信玄と北条氏により行われた合戦）場等がありますが、今回は二俣川の戦跡めぐりをします。

・**場所** 相鉄線鶴ヶ峰駅下車、旭区役所附近帷子川と二俣川の合流点（鎌倉街道中の道）万騎ヶ原（旧牧ヶ原駒の生産地）

・**原因** 北条時政の後妻、牧の方と女嬪平賀朝雅がクーデターを計画、北条氏に匹敵する畠山重忠をなきものにせんとする。それから時政と組み将軍になろうとした。

・**計画** 武蔵の大武士団、正面きって戦えず、時政に重忠謀反の心有りと告げ、一方、畠山の同族稲毛三郎重成・榛ヶ谷四郎重朝兄弟を使って、鎌倉に急用有り、と誘い出させる。時政は実子、義時を大将にして万騎ヶ原に布陣させる。

・**結果** 何も知らない重忠は元久2年6月19日（1205年）小倉郡菅屋の館（現在埼玉県比企郡嵐山町）を134騎を従え出発、22日この地で鎌倉勢を見て初めて謀られた事を知り家臣が「一応引上げて合戦の仕度をして出直したら」と言うが、重忠は「そんなことをしたら本当に謀反の心が有ったと言われるから」と戦う。日中は勝負がつかなかったが、夕方になって愛甲三郎季隆の射た矢が重忠に当り戦死。行年42歳。一族郎党139騎も玉砕した。

その後、義時は重忠の無実を知り、実父善時一派を追放、稲毛重成、榛ヶ谷重朝兄弟を討つ。

史跡 旭区役所の〔旭区内散見〕パンフレットより転載。

①首洗い井戸……区役所の後

②鎧の渡……昔は河原も広く船で渡った。こしっぱと言ひ、現在はこしっぱ橋がかかる。

③首塚……重忠を斬った所。首は鎌倉に持ち帰られた。

④駕籠塚……重忠の内室の塚。公の後を追ひ、この地まで来た時、冤死の報を聞き自害した。そして駕籠のまま埋葬された。

⑤六ツ塚。霊堂……玉砕した重忠以下134騎を6ヶ所に分けて埋葬した。

⑥矢畑。越し巻き……鎌倉勢の射た矢がこのあたり一面に落ちた。またこの辺りで取囲まれたと言う。

⑦さかさ矢竹。かたわれしどめ……重忠戦死の前に「我が心正しかれば、この矢に枝葉を生じ繁茂せよ」と、この地に立てた矢がこの辺りに茂りつづけたと言う。又激戦の際馬の蹄に踏みにじられた為、この

辺りのしどめは片割れのが生ずるようになったと言う。

⑧隠れ穴……………73.5mの高山の中峽に有る4世紀頃の横穴住居跡と言う。愛甲三郎季隆がこの穴にかくれて日没近く重忠を射たという。

⑨畠山重忠公の碑……区役所前に有り昭和30年6月22日(戦死の日)、750年を記し、地元と畠山有志により建立。

⑩畠山重忠公遺勲碑……明治25年10月、万騎ヶ原の有志57人によって建立。

⑪白根不動・白糸の滝……重忠には関係ないが源義家ゆかりの社。白糸の滝は巾9m落差55m。横浜市で唯一の滝。溪谷を中心に一帯は見事な自然境になっている。

愛甲三郎季隆 厚木市の愛甲に領地があった。小田急線愛甲石田駅近辺の円光寺に宝印塔があり、又北の方愛甲団地附近の宝積寺に墓と言われる五輪塔がある。横山党で弓の名人源頼家の若い時の弓の先生。富士の巻狩(狩場を四方から取り巻き、獣を中に追いつめて捕らえる狩猟)の時、曾我兄弟の仇討に巻きこまれて負傷した。後年和田の乱(建暦3年(1213年))の時に滅亡した。なお、愛甲石田の石田は、木曾義仲を近江の粟津で討取った石田為久ゆかりの地と伝えられている。

稲毛三郎重成 向ヶ丘遊園地のそばにある榊形山は居城であった。稲毛庄一帯を治めていた。先祖は畠山氏と同じ秩父重弘。山頂には石碑があり事蹟が書いてあります。源頼朝に可愛がられて内室は北條政子の妹ですが、病死した為供養に相模川に橋を架けた。落成式に参列した頼朝は馬から川に落(馬入川)ち、それが原因で死亡したと言われている。中腹の広福寺に墓がある。

榛ヶ谷四郎重朝 二俣川近辺を榛谷御厨領と言ひ、この辺りを治めていた。現在はバス停榛ヶ谷。榛ヶ谷橋にのみ名を残す。今は半ヶ谷と変っている。

相武台のルーツを探る … 古老に聞く<第2回>

大正時代の相武台について

時 昭和58年5月21日 午後2時～4時

於 図書館相武台分館学習室

講師 安藤 忠保氏(明治30年生まれ84歳)相模原市新戸に生まれ、育ち在住。

お話のあらまし

- ・**相続について** 現代は個人であるが、旧憲法では家が中心であったので他家再興ということが行われた。忠保氏は西山の家系であるが、父忠次郎が安藤伊左エ門の養子となったので安藤姓を名乗っている。
- ・**入営** 大正8年近衛師団第二連隊(九段)へ入隊した。村で8名中、合格したのは忠保氏ただ1人だった。当時はバスも鉄道も無かったので橋本まで歩いた。新戸 → 上磯部 → 当麻 → 番田 → 上溝 → 作の口 → 変電所 → 橋本、橋本からは横浜線で八王子、八王子からは中央線で東京へ出た。
- ・**関東大震災** 朝鮮人が暴動を起こした、とどこからともなく伝えられ、村々は見張りを立てて警戒した。忠保さん達若い衆は竹槍を作ったり刀を研いざりして用意した。3回声をかけても返事が無ければ

切っていい、と申し合わせた。平片ワカさん（現新戸在住）は横浜で看護婦をしていたが、新戸の生家へ帰る途中、白衣が朝鮮人と間違えられ、座間の見張りの者に連れられて来た。白衣といっても汚れているし、顔も真黒だったので、すぐには判らず（結局は判ったが）怖い思いをしたことと思う。

・**相武台** 元は中っ原・出口といいすべて畑だった。養蚕の為の桑畑が多かった。新戸からは南のおお坂（現在のずい道）を登ったり、北のおお坂（現在は座間キャンプの中になっている）を登って行った。北のおお坂の道は現在のつくしの幼稚園の辺りへ通じていた。

・**相模川の白帆** 新戸に渡船場があった。村の人たちは帆かけ船で馬入まで下って伊勢参りに出かけたという。若い者は田名へ帆かけ船で遊びに行った。

・**新戸の史蹟** 神社は上と下に、寺も昔のまま現在地にあるが、現農林省の土地の中に大六天社があり、現在地元が払下げの運動中である。鳩川にかかる妙伝橋・四国橋も今は立派になったが昔は板の橋だった。橋の名の由来なども調べてみると面白いのではないだろうか。妙伝橋を渡るとごはんぎょう跡があった。分かれ道になっていて、右（会田隆二氏宅の方）へ行くと、横宿を経て相武台下へ通じ、左は陣屋小路へ行ける。徳川時代お陣屋があった。ごはんぎょうで判を押してもらって通行が許されたという。戦前は役場からの通達が貼り出されたりしたが、戦後アメリカ兵の大きい車が、相武台下駅からザマキャンプへ物資を逆ぶ際に、曲がりにくいのでこわしてしまった。

・**民話** パス停勝坂入口から勝坂部落へ行く坂を“猫坂”と呼んでいる。昔猫がたくさん集って、手ぬぐいをかぶって、夜な夜な踊った、と伝えられている。又“天狗田”といって田園の1画に、稲を作らず草にしていたところがあった。今はキャンプの中になってしまっているが、これには面白い話がある。新戸の山口徳次さんの三代前のおじいさんの時に、本当にあったことらしい。

（以下略）

（編集者注）“天狗田”のお話は、安藤忠保氏執筆の文中94ページをごらん下さい。

☆この日の講話が、翌昭和59年4月“親集落新戸めぐり”のきっかけとなりました。

鎌倉古道

源頼朝が鎌倉に幕府を開くと「いざ鎌倉」というときのために鎌倉の七口（極楽寺坂切通、大仏切通、化粧坂、亀ヶ谷坂、巨福呂坂、朝比奈切通、名超切通）を開いて、各地への幹道を設けた。これが鎌倉古道で、鎌倉道、鎌倉街道などとも呼んでいる。鎌倉古道は、鎌倉から遠くなるに従って枝のように分れており、ほとんど鎌倉を中心とした各地各郡を通っている。

つまり鎌倉七口のうち山の内から出る、いわゆる多摩の山道がそれで、小川、高ヶ坂、原町田、本町田、山崎、図師、小山田、小野路を経て武蔵国の府中に至っていた。しかしこのコースは宴曲抄（えんきょくしょう：中世の歌謡集）による古街道で、間もなく本町田から野津田、丸山を通って小野路関戸へ通ずる新道が出来、この道を鎌倉道とふつうは呼んでいる。これ等の古道の面影を今も伝えているところ、小川の柳谷戸、山崎町の七国山、小野路別所付近などは人々の懐古（かいこ：昔の事をなつかしく思う）の情をそそらずには置かない。

(一) 惣吉稲荷

こはもと、無量山西光寺という浄土宗の寺があった。徳川譜代の臣で地頭大岡吉重郎義成(慶長4年、42歳で没)の下男で惣吉というものがいた。忠実によく主人に仕え、主人没後は西光寺の寺男となつてその墓を守り、一生を終った。後に西光寺が廃寺になったので末社の稲荷を残し惣吉稲荷と命名した。

(二) 青柳寺

日蓮宗で鎌倉本覚寺の末寺。今から約400年前(天正年間)に渋谷越後守守義は、足利義昭に仕えていたが、織田信長に対し、兵を起こそうとした義昭に反対して、関東に下つた。ある夜の夢に、天人が法華経を唱えながら空を舞い沢辺の柳の下におりるのを見た。このことを目黒碑文谷の法華寺上人に話し、夢のとうりこの地に青柳寺を建て日題を開山とした。

(三) 高ヶ坂石器時代遺跡

この遺跡は稲荷山と牢場、八幡平の三ヶ所にある。大正13年10月、土地の人が耕作中発見し、大正14年5月1日内務省事務官児玉九一氏外の共同発掘の結果、縄文中期の敷石住居跡であることがわかった。わが国の遺物考古学時代から地域考古学への推移期における縄文文化時代住居跡として発見せられた記念のところである。大正15年2月には国の史蹟に指定せられた。

(四) 井手の沢古戦場

神社の裏手一帯は湧水の出る低湿地であった。社殿は高台にあるが鳥居からの参道は谷戸の中央部を通っている。左手の谷戸の下を湧水が流れている。又この地は古戦場でもあり、建武2年(1335)の中先代の乱に出陣した足利直義は、ここで終日合戦したが敗走した。

(五) 町田市立博物館

当博物館は、昭和48(1971)年11月に町田郷土資料館として開館され、51年4月に現在のように改称された。年に数回の特別展や日曜ごとの講演会や映画会なども開催される。

(六) 本町田遺跡公園

博物館の先200mほどで丘陵の頂上に出る。眼下に藤の台団地が見え右手が遺跡公園である。ここは藤の台団地の造成に先立って発掘調査されたもので、遺跡の中心を公園にして昭和46年に開園された。縄文時代、弥生時代の遺跡が複合しており、住居址が復元されて当時の生活を知ることができる。

(七) 七国山

七国山。二の山の標高は128mあまりで、武藏相模など七国の展望がきくところからこの名がある。頂上へいたる雑木林の中の途中には鎌倉井戸とよばれる井戸の跡がある。この井戸は本町田の今井谷戸から山崎町への坂をのぼり切った、峠路の左の山際にある。深さ4m、岩磐に堀られてあるので如何なる早魃(かんばつ)にも水が絶えたことが無く、多くの武士や旅人が馬を休めて上り下りの咽喉(いんこう：のど)をうるおしたところという。

(8) 薬師池

七国山の麓にはむかしから薬師様とって親しまれた普光山福王寺の薬師堂が立つ。その足下にひかえる薬師池は天正5年(1577)から13年間を要して、福王寺谷に2000余坪にわたって開さくされた堀用水で福王寺池ともいう。この薬師如来は文化財にもなっている。平安時代の古仏で眼病に靈験ありと信者を集め医王山の名がある。

(9) 小野神社

ここは鶴見川の支流小野川沿いの山あいの地で木立も深い。小野神社の鳥居の手前には石灯籠があり、その脚の部分には「小野大明神、秋葉大権現、愛宕山権現」と刻まれている。社殿の右手には明治の末に由木村の青年と力くらべをして勝ったときの力石(107kg)がある。左手には薬師石と呼ばれる新田義貞が戦勝祈願に奉納したものとされる岩石がある。

(10) 大泉寺

安貞元年(1227年)小山田行重が父有重の菩提を弔うために、ここより更に西北の地に真言宗高昌寺を開いたのが始まりで、のち永享年間にこの地に創建したものである。開山は無極慧徹で曹洞宗に改めた。境内は鎌倉時代の御家人小山田有重の居館跡とされ小山田城跡ともいわれている。

(11) 木曾一里塚

一里塚は昔の里程標識のため一里(約4km)ごとに築いたものである。この一里塚は元和3年(1617)3月日光東照宮が竣工し久能山にあった徳川家康の遺骸を移葬したときつくられた。

相武台歴史同好会

宮原晁二郎

会発足4年目を迎え、この1年間、内外ともに活発な活動を行うことが出来ました。

“私達の住む町のルーツを探り、ふるさとの歴史を残し、次代に伝えよう”これが私達の会の目的です。

会員も約30名を数え、着々と目的に向って、盛況な行事とともに順調に歩んでいます。

58年度の活動状況

月日	催し	内容
1.22	打合会	本年度事業計画 個人研究のテーマについて
2.19	歴史講座	天平文化の発展 仏教文化
3.12	講演	第1回相武台のルーツを探る 「戦中・戦後の相武台」 講師 手塚シゲ氏
4.6	史跡めぐり	「二俣川古戦場」

	新入会員とともに 親睦を兼ねて1日散策
4.16 歴史講座	鎌倉時代の新仏教文化 各宗派の発達
5.21 講演	第2回相武台のルーツを探る 「大正時代の相武台について」 講師 安藤忠保氏
6.15 史跡めぐり	「町田・相模原の鎌倉街道」公民館と共催 一般者も参加して内容豊富な楽しい1日でした。
7.16 講演	陸軍士官学校移転後の相武台と、終戦直後の相武台 講師 瀬尾勇美子氏
9.17 文化財展の準備	文化財展出品作品についての打合せ、冊子「相模原の自然と文化」の原稿依頼
10.11 〃	文化財展出品作品製作・文集・写真
10.15 〃	文化財展出品パネル製作
11.3 作品展示 ～6	文化財展（於一大野南公民館） 史跡めぐり「町田・相模原の鎌倉街道」パネル作品展示、写真ガイド。
11.6 講演	文化財展記念講演会に参加 講師 千葉県教育委員会 後藤和民氏
11.19 歴史講座	江戸時代田名における1つの越訴事件と一遍上人について
12.17 反省会	1年間の反省 来年度計画

59年度は、対外的な会議にも積極的に参加するとともに、会員相互の親睦を計り会独自のテーマに取り組んで行きたい。

(以上自然と文化第5号寄稿文より)

相武合のルーツを探る …… 古老に聞く (第3回)

陸士移転後の相武台と終戦直後の相武台

日時 昭和58年7月16日午後2時

於 相武台公民館仮設建物会議室

講師 瀬尾勇美子氏 (昭和9年生まれ) 相模原市相武台3丁目在住

お話の概要 陸軍士官学校が昭和12年に東京市ヶ谷から移転した時に、同校に勤務する父と共に横浜から相武台へ移り住み現在も住んでいます。

小学校は相武台から現在の座間小学校に通いました。士官学校前は山が迫り、大きな石がゴロゴロして、今よりもっと狭い道でしたが、行幸追路ができて急に良くなりました。砂利道でした。

ずい道が出来ました。士官学校の下を抜いて相武台前と相武台下を結ぶ道路としてでした、当時は駅発のパスがずい道を通っていました。駅は士官学校前といい待合室として立派な応接室があしました。

(勿論一般の人は入れませんが)。小さな駅舎の前は広場になっていて 馬をつなぐ大きな桜の木がたくさんありました。

駅前には瀬戸商店(現・瀬戸ビル)・旅館(現・相信)・帽子屋(現・飯島百貨店)・軍服を売る洋服屋・写真屋・駐在所・変電所(現・ヨーカドウあたり)などがありました。

戦争が激しくなり、通学途中で空襲警報が出ると側溝にもぐって防空しました。桑の皮をとり、束ねて学校へ持って行きました。繊維にするとのことでした。

終戦後の相武台駅周辺は米軍人向けの店がたくさん出現しました。座間中学へ行く(現行幸道路から中学への三叉路信号傍三菱石油のところ)道にダンスホールが出来たり、飲食店も質屋さ人も米人向けの方が多いくらいでした。

ずい道は、車を入れるので、牛馬車は通るな、と米軍から命ぜられ、旧陸軍の練兵場あとを開こんの為に通行していた新戸の農家の人は大変困ったという話があります。

援護浮浪児を集める施設、成光学園も出来ました。現左の都南自動車教習所の前身で、当時は旧陸軍の用地を開こんして食料を自給自足していました。

(以下略す)

相武台歴史同好会59年度事業報告

昭和60年1月19日

会も歩み出して、はや5年たちました。意義ある年を迎えて“記念冊子の発行、地域の歴史の研究等”盛りたくさんの行事とともに出発しました、私達の公民館の落成という喜ばしい春がきて、快適な環境の中で益々の活動を送ることが出来ました。

59年 本年度事業計画

- 1.21 相武台のルーツ、見学地記念冊子 会計報告 他
- 2.18 講座 金井先生欠席 休講 久保田副会長新戸見学会事前説明会
- 3.9 新戸下見
- 3.17 新戸見学会
- 4.10 座間キャンプ見学会
- 4.21 講座 金井先生 「相模原における自由民権運動」
- 5.22 伊勢原の史跡散策 日向薬師 道灌の墓 上杉館跡
- 6.9 「市民史跡めぐり」
- 6.16 各自にて参加
- 7.21 講座 金井先生 「清兵新田の開発について」
- 9.1～ 1日、8日、15日、22日、29日 「地域の歴史を知る講座」公民館と共催
- 9.4 相模原の自然と文化 臨時掲載原稿 予定討議
- 9.27 「文化財展」会長報告会 同好会出品物・研究テーマ等細部決定
- 10.～ 6日、13日、20日 「地域の歴史を知る講座」
- 10.2 「文化財展」展示品作業打合せ開始

- 10.9 ”
- 10.16 ”
- 10.23 会場要員決定、広報用ポスター作成
- 10.1 1日、2日、3日 「第10回相模原文化財展」於 相武台公民館
- 11.9 反省会

*講座 史跡散策 相武台地域の研究と一步一步学び楽しんだ1年でした。公民館との共催による歴史講座、8回の開催実績と「文化財展」の相武台公民館が会場に選ばれた事は特配すべきことでした。活発な年だったと思います。反面、健康を害された方、御都合の悪く参加出来なかった会員の方々には60年度の御活躍を期待します。記念冊子の発行は残念ながら来年度に持ち越しとなりました。
(野口記)

新戸散歩のしおり

- ・と き 昭和59年2月17日(土)
- ・集合場所 相武台前郵便局前
- ・集合時刻 PM 1:00
- ・散 会 PM 4:00

く概 況)

新戸は私たちの住む相武台地区の親集落であり、最も関りが深い地区である。昔、相武台地区のあたりは、新戸住民の入会い野であった。

西に相模川に沿い、中央を鳩川が流れ、水の便に恵まれている為1500年以前から村民が住みはじめたと伝えられていたが、最近になり、5000年～6000年以前の人々の住居跡(新戸遺跡)が発見され、現在発掘調査中である。

①**新戸トンネル** 長さ500m。陸軍士官学校がこの地に移転した時、その敷地の下を貫通し、村民の相武台(さがみ野)への通路として造られた。

②**一里塚** 1617年(元和3年)神柩(しんきゆう)通御(つうぎよ)(家康の遺骨が日光へ)の時築立した。新編相模風土記稿によると「高さ一丈頂に榎樹アリシガ寛政中枯藁ス」と記されているが現在はただこんもりと檜の木が数本あり、低い塚らしい跡が残っているのみである。

所在地=新戸土井下2391番

現地主=新戸在住川崎丈助氏

③**妙典橋** 新戸の中央を流れる鳩川に架かる橋が3ヶ所ある。武井橋とこの橋と川久保橋(現四国橋)である。

④**ごはんきょう跡** 昔の高札場か?。村の人はこう呼んでいる。村へ出入りする人をチェックしたところという。

⑤山王社（日枝神社） 村の鎮守である。祭礼は夏。

⑥水路 明治26年2月、新戸に大火があった。下村から火が出て西の風にあおられ、新戸村の大半が焼けた。原因は、こどものたき火が稲ばらぼっちに燃えうつり、家々に燃え広がったという。その結果、各々の家敷境へ水路を引いた。日常は各戸に川端で洗い物をする村人の姿が見られた。又自然排水の役目もしていた。

⑦旧家 安藤一氏宅「天文（室町時代）の頃祖先与太郎近郷七村の里長タリシと云ウ。家伝の文書2通アリ」と古書に記されている。

⑧内藤修理亮清成陣屋蹟 陣屋小路にあり、天正年中清成建てる所という。広さ2反6畝余。その後領主遷替して阿部飛騨守正喬に至り、元禄13年廃絶せしより村民の居地となれりという。

⑨長松寺 万年山と号す（文化財展の項参照）

⑩白山社 村の鎮守、神木槻樹囲3丈許(ばかり)、祭典は春。

⑪宗仲寺 来光山蜂月院と号す。慶長8年領主内藤修理亮清成が実父竹田宗仲を菩提の為に創建した。（但し宗仲は慶長11年に没している。）内藤氏墓5基あり、鐘楼（延宝6年铸造）東照宮より賜わりし茶器七種ほかの寺宝がある。又水子地藏は有名である。

⑫宗仲寺は新戸ではなく座間市に所在しているが、内藤陣屋と深いかわりがあるのが有るので見落すことは出来ない。（新戸を座間群新戸と称した時代があった。）

昔 話

ザマキャンプ見学会

安藤忠保

1. 去年「歴史研究会」の仲間になって久しぶりに相武台のザマキャンプ内を見せていただきました。そして相武台の文字を刻んだ碑の前で、写真をとってもらいました。

私のような80才以上の者にしますと昔からのことを思い出します。畑であり山であり耕作した所がこの様にかわっているからです。久保田さん有難うございました。

畑の中には大六天様もありました。昔から芝八反と云って、1本のシバの木で八反歩(たんぶ)の土地がいっぱいだったそうです。私ら子供の時は毎年1月8日にはシメナワとお米をもってお参りに行きました。だんだん薄れてきたが昔からの御社です。その少しばかり手前には昔からの避病舎(ひびょうしゃ：避病院・明治時代に造られた日本の伝染病専門病院)がありまして、私も80年ばかり前にごやっかいになりました。

2. 話はかわりますが神話のような話があります。谷戸田のことですが、山口徳次さんの云う話ですが、おじいさんが剣道の達人な人で、10名位いの人が大麦のポウチ(棒打ち：脱穀のため刈り取った麦などを棒で打ちつけた)をしている所をそのポウチに当らずに通ったという人が、一人で谷戸田へ行って鎌で草刈をしていたら、大きなうなぎが穴から首を出、していたので、一刃のもとに切ろうとしたら、うなぎはいつの間にかかくれてしまった。わきを草刈してまた行くと大きなうなぎが又頭を出していた。

今度こそ切ってしまうと思って、鎌で切ってみたがやはり切れず、草を刈っていたら又もとの穴から首を出していた。腕のいいおじいさんは今度こそ自分のものにしてみせろと思って、すばらしい鎌で一刃のもとに切つてやろうとしたが、やはり切れなかった。切れないと思ったら、その上の方の木の枝で天狗様の大きな笑声が聞こえたそうだ。その畑が代々残っていたが、今はその山口徳次さんの畑は公園の一部になっていた。

3. そのあたりの田んぼにはホテルが沢山いた。帰るのが遅くなるのも忘れてホテルをとってきて子供たちへのみやげにしました。

そのうつりかわりは早い物で、私共の見た相武台も、心さびしい物があります。

伊勢原の史蹟

・集合日時 5月22日(火) 午前9時30分

・集合場所 相武台前駅改札口前

・昼食 各自持参 日向薬師にて食事

・費用 交通費 690円

宝物拝観料 1人200円(会負担)

・スケジュール

相武台前駅発 9時48分 約20分にて伊勢原駅着

日向薬師行バス出発 10時30分 約20分にて終点到着

約30分ゆっくり坂道石段の参道を登ります。薬師到着は11時20分ごろ

宝物拝観・昼食・散策は約1時間40分ぐらい。

午後1時出発、下のバス停に向かい、1時35分発のバスにて台久保下車(約15分)

太田道灌の墓・七人塚・山王社(上粕屋神社)・空堀・上杉館跡を見学

3時15分発のバスにて伊勢原駅へ3時30分ごろ到着→小田急で相武台前駅へ。

4時30分相武台前駅にて解散。

先ず小田急沿線の史跡を思い出しましょう。

座間の先の左手の丘には古墳がありました。国分寺跡の巨大な礎石、相模国守ものといわれる大きな古墳、海老名氏、国分氏の滅亡、尼の泣水の話等、色々ありました。以前は遺跡をこわして学校を建てたり、道路を造りましたが、最近はなるべく残すようになりました。

その一例として、本厚木を出て間もなく、246号線のパイパスが小田急線と並んで走る右側にトンネルが造られています。小田急と離れた処に見えます。このトンネルの上が古墳で、こんもりと木が繁っています。始めは崩す予定でしたが、保存したいとの運動も有って、結局トンネルになりました。地頭山トンネル(名前は違うかも知れません)といえます。

愛甲石田は二俣川の戦で畠山重忠を弓で射た愛甲三郎季隆の館跡、墓石等有ります。また木曾義仲を近江の粟津の田で討取った石田為久ゆかりの地といわれています。

さて日向薬師行のバスも途中史蹟の中を走って行きます。温泉入口附近は実蒔原(さねまきはら)と

いう両上杉が戦った古戦場跡で、鎧塚が当時をしのぼせるだろう。洗水（あろうず）は頼朝の馬を洗ったところだ。

石屋さんが大変多いです。勝五郎という人が信州高遠で石工技術を習得して来てから有名になった所。大山の見晴台を東へ、だらだらおりてきた所に大きな石地藏様が立っています。これは勝五郎が作ったといわれています。参道の石段下は衣裳場(いしば)といわれ、頼朝が白装束に正装した所といえます。登るゆるい坂道も、よく見ると岩石です。所々に木の年輪のようなものが見られます。これは泥岩等が風化する時のたまねぎ状構造というもので、この山も昔は海底にあったのです。途中仁王門があります。鎌倉時代の後藤運久親子の手になるものです。やがて草ぶき屋根の本堂が見えてきます。元正天皇（716年）のころ僧行基が開いたといわれています。現在宝城坊が管理しています。明治初年ころには12坊ありました。本尊は薬師如来、日光、月光の両菩薩で鉦彫（なたのほり）で有名です。境内には2本の老杉、幡かけ杉（天然記念物）12神将になぞらえられた12柱の鐘堂、銅鐘は1340年作の重要文化財です。源の頼朝は娘の病を、北條政子は安産を、平安時代末の女流歌人、相模（百人一首の「恨みわび ほさぬ袖だに 有るものを 恋に朽ちなん 名こそおしけれ」 36歌山の1人で紫式部より約60年位後の人。相模守大江公資の妻、本名は乙侍従）も眼を病みここに参詣に来ました。その時詠んだ歌の石碑が右手にあります。「さして来し 日向の山を 頼む身は 目も明らかに 見えざらめやは」とあります。日向川の上流には浄発願寺に渡る赤い橋があります。力道山の冥福を祈って義父が寄贈したものです。そのまた上流には、左手の畠の中に大友皇子の陵といわれる五層の石塔があります。最近新聞等で知られるようになった草壁皇子の従兄弟にあたり、壬申の乱で近江大津の宮近くの山中で敗戦のため、首をくくり自殺したことになっています（日本書紀）。しかし関東へ脱出した説も有り、一時ここ伊勢原にも滞在し、後、三浦の走水より木更津をとおり山中に入り、田原の宜という仮宮をつくりましたが、大海人皇子の知るところとなり滅ぼされました。現在の久留里線の終点手前の俵田駅附近に、皇子が堰、壬申山、君山、御立野、天谷、御厩、十二所神社（侍女12人が自害したところ）等が残っています。明治3年弘文天皇と追諡（死後におくる名）されて歴代天皇に加えられました。

さらに上流には石雲寺があり大友皇子の位牌、小田原北條の古文書があります。元浄発願寺は昭和13年の台風のため土石流で流されて元の地は今も荒々しい跡が見られます。

道灌の墓・上杉館跡

上杉家は源氏三代の将軍の後、北條氏によって迎えられた宮将軍について京都より鎌倉にきて、五家に別れました。山内(やまうち)、扇谷(おおぎがやつ)、犬懸(いぬがけ)、詫間(たくま)、庁鼻(深谷こはなわ) 庁鼻を除く四家は交互に鎌倉府の執事管領をつとめたが犬懸、詫間の二家は早く衰え、山内、扇谷の二家が栄えた。管領とは公方(鎌倉=関東)を補佐する役職。扇谷、山内両家は鎌倉公方、持民の、永享の乱(永享10年(1438))将軍継嗣問題から室町幕府と対立した鎌倉公方足利持氏が、和解をすすめる上杉憲実に対して挙兵)の時は、京都の室町幕府の六代義教将軍の命で持氏と戦う。関東は両上杉と鎌倉公家に別れて大争乱となる。海老名一族はこの時は持氏側である。持氏は自害して、関東管領上杉の勢力が強まったが、持氏の子成氏が、後許されて鎌倉公方となる。が、成氏は親の仇両上

杉と対立する。この時代に太田道灌は活躍するのである。

扇谷上杉の家老太田資清の長男として生まれ康正元年（1455年）24才で家督を継ぐ。当時成氏は鎌倉から逃げ出して古河によったので古河公方と呼ばれていたが、両上杉を討たんとし、味方を集めていた。道灌は江戸氏（小田急線喜多見駅下車慶元寺に江戸一族の墓あり）より江戸の地を譲りうけて、江戸城を築いた。今も皇居内には道灌堀の名が残る。江戸城を根城として公方がたの豊島氏の平塚城（東京都北区中里、現在の平塚神社）石神井城（現在の豊島園近辺）を落城させた。

豊島氏の照姫は、代々伝わった宝物三つをだいて城の本丸の北の池に入水しました。後、この池を三宝寺池といい今も残っています。一方山内上杉家では家老の長尾景信が死亡後、家老職を弟の忠景が継いだので、実子の景春は不満に思い、主家の山内上杉に反旗をひるがえし、古河公方に味方した。景春に味方した武士達は小沢城（相模原市田名の対岸）溝呂木城（厚木市のどこかは不明）小机城等を落城させたので扇谷上杉は山内上杉より強くなりだした。山内上杉は太田道灌が、その後江戸城河越城を改築したのを利用して、「道灌は山内上杉を討つのが目的だ」と顕定が扇谷上杉定正に吹き込んだので定正は「両上杉が不和になるのは国土乱逆の発端になる」と答え、道灌暗殺を計画したという。また別の説では、北條早雲が関東入国をねらっていたが、道灌がいては邪魔になるので、数十人のスパイを放ち、「道灌は両上杉を亡し自から関東首領になるつもりだ」と盛んにデマを飛ばしたためとの説もある。道灌は55才で死亡しました。もう一つの墓が、駅の東方の大慈寺に、首塚があります。道灌の画像が寺宝としてあります。

道灌は山吹の一枝を出されて意味がわからず、その後歌道を習いました。山吹の里という所は各地にあります。東京の山手線高田の馬場駅近辺のが有名です。八代将軍足利義政から江戸城の様子を聞かれた時、「わが庵は 松原つづき 海近く 富士の高嶺を 軒端にぞ見る」と答えました。また後に花園上皇から、武蔵野や都鳥について御下問があった時「露おかぬ かたもありけり 夕立の 空よりひろき 武蔵野が原」「年ふれど 我まだしられる 都鳥 隅田河原に 宿はあれども」とお答えしましたので上皇もいたく感心され「武蔵野は 高菅のみと 思いしに かかる言葉の 花やさくらん」と御製を下賜され、大いに面目をはなつたといひます。

歴史書を見れば、罪なき人々が、権力謀略の犠牲となって多く殺されています。こんな話は昔の事だけでしょうか、現在も有るかも知れません。よく考えて見ましょう。

第10回文化財展開催要綱

1. 期 間 昭和59年11月1日（木）～3日（土）
2. 会 場 相武台公民館大会議室
3. 主 催 相模原市教育委員会
4. 主 管 第10回文化財展実行委員会
5. 講演会 テーマ「郷土学習と博物館」
講師 新井一政氏（神奈川県立博物館主任学芸員）
6. その他 粟飯試食会 井上正二氏他

文化財記録映画の上映

もくじ

第10回文化財展開催に当って	代表 宮原 晟二郎	
相武台の成り立ちとその変遷	相武台歴史同好会	1
時宗と當麻山道みちしるべ	大野北郷土の会	11
高札と高札場	橋本郷土研究会	21
高橋泥舟展	相原の歴史をさぐる会	31
相模國式内十三座	さいこの会	41
田名望地河原の弁天堂	相模原郷土懇話会	53
ヤツボ博物誌（田名編）	相模原自然の会	63
私が拾った土器・石器あれこれ	相模原考古学研究会	73

第10回文化財展開催に当って

大山、丹沢の山々、江の島の海。相模川等に近い高台の相武台は、大変環境のよい所です。併し、この市民は一部の人を除いて、大部分が戦後から住みついた新しい市民です。市の北部—中央部とは交通の便も悪く、色々な催物、展覧会等があってもなかなか行けず、むしろ町田、海老名の方へ出かけがちです。私達のふるさとになる相模原市の事を考えれば、もっとお互いに交流を計らなければなりません。多くの人の努力により当地にも図書館分館が出来、多くの人達が利用しています。今回相武台公民館新築を機に、市の各地区の自然文化財を愛する人々の協力を得て、初めて展覧会を開くことになりました。只の野原と思っていた相模原も案外歴史も古く色々な遺跡・伝説が有ることを発見し、相模原に愛着を感じる事になりましょう。

今後も、これを機会に催物、講演会等を当地でどしどし開いてもらいたいものと願ってやみません。

昭和59年11月1日

第10回文化財展実行委員会

代表 宮原 晟二郎

相武台歴史同好会

- ・設立 昭和55年1月 会員 25名
- ・代表者 宮原 晟二郎
- ・事務所 相模原市相武台団地2-7-5-23（代表者宅）

案内

わたし達の住む相武台のルーツを探ろうと、講義・見学を交互に、年間プログラムを組んでやっています。歴史を尋ねることの好きな人が、親しみながらの気楽な会です。はじめは少なかった会員も年々増えて、史跡散歩で電車を利用する時などは、目印の旗が必要になって来ました。文化財展へ参加することは、家業のこともあり、なかなか大変ですが、1年間の学習成果を発表する過程で、復習だけでなく、新しくいろいろ知る機会ともなり、そんな魅力にひかれて共同製作の集まりに熱がこもります。ことしては、親集落ともいべき新磯地区と相武台との関わり、その間をつなぐキャンプ・ザマを、総論的にまとめてみました。年々つみ重ねて、次第に深く掘り下げて行きたいと考えています。

相武台のなりたちと変遷

相模原市の南部に位置し、最少の面積で最多の人口を持つ相武台地区。どのようにして出来たのでしょうか。その移りかわりの概略を記してみました。

約1億年前は海でした。その後地核変動があり陸地が海面へ現れ、約40万年前の箱根火山の噴火の活発な時代があり、また、約2万年前は古富士火山が盛んに活動した時代に、これらの火山灰が降り積り出来た陸地であるとされています。相武台を相模川が流れていたのもその時代でした。地層を調べてみると貝の化石や白い岩が出て来ている所があり、海であったことが見られます。地表の黒土の下は赤土で火山灰、その下の砂利層は相模川であったことを知ることが出来ます。その後この川は度々氾濫(はんらん)を繰り返し、現在のところを流れています。さがみ野は地図で見ると延長30km、幅1km～8kmの洪積台地で鳥帽子型をしており、上段・中段・下段からなりたっています。相武台はその上段に在ります。

広々とした平たんな相武台と座間丘陵 - 現在のザマキャンプ - とその下のムラ(現在の新磯地区)は、以前は同一地区でした。その中で相武台はムラの人々にとって、なくてはならない茅野でした。茅は屋根材や家畜のえさ、又、「さいこ」(根を乾燥し薬草)という薬草を掘ったりして、くらしの足しにしていたが、江戸時代の終り頃から、開墾をして、畑を耕作するようになりました。

それでは、いつのころから人々はこの地に住みついたのでありましょうか、数々の文化財が残されています。

文化財のあらまし

★**勝坂遺跡**(縄文時代・約6000年前) 大正15年、大山伯という学者によって発掘されました。縄文時代の中でも最も芸術的な土器が、現中村正衛氏邸内の畠から、はじめて発掘され、その附近一帯の約20,000㎡が国指定地として保存されています。勝坂式土器の標式遺跡として有名です。永禄12年(1569年)甲斐の武田信玄が小田原の北條氏を攻めた時、この地に陣を張り、勝鬨(かちどき)：戦いに勝ったときあげる鬨(とき)の声をあげたので、以来この辺りを勝坂と呼ぶようになりました。

★**新戸遺跡**(縄文時代、奈良、平安時代、中世) 勝坂から南へ1kmの地で、各時代にわたる埋蔵文化

財が発見されました。県立新磯高校（現在は廃校）建設に先立って現在も発掘続行中です。

★**石楯尾神社** 倭武尊(やまとたけるのみこと：日本武尊)の相模地方における足跡は多いがその中の1つ。勝源寺の後方の山上にあります。

★**有鹿(あるか)谷** (大和時代・約400年～500年) 勝坂遺跡のある台地の下、100mのところに洞があり、水が湧き出ています。有鹿神社(海老名市)の水もらい祭祀にともなう伝説が、いろいろと伝えられています。

★**能徳寺** (安土桃山時代) 磯平山と号し曹洞宗 有鹿谷から相模川へ向って行くと大川の近くにあります。慶安2年8月(1649年)寺領7石6斗余の御朱印を賜わり、開山は寛応(天正8年(1580年)没)と記録されています。

★**御獄(みたけ)神社** (安土桃山時代) 戦国時代の磯部城の旧跡といわれています。

★**長松寺** (鎌倉・室町時代) 新戸国鉄相模線相武台下駅近くに 있습니다。萬年山。臨濟宗。慶安2年(1649年)8月、寺領10石の御朱印を付され、市の文化財指定の文書もあります。

★**常福寺** (鎌倉・室明時代) 相武台前駅からバスで磯部行き、常福寺バス停で下車。すぐ上にあります。開山は本覚了堂(正安3年(1302年)没)本鏡山・臨濟宗。

★**勝源寺** (江戸時代初期) 磯部勝坂にあり金沢山と号し、開山は笑山充闇、寛永5年(1628年)没)。この青面金剛は明治待代に養蚕祈願の庚申さまとして賑わいました。

★**内藤修理亮清成陣屋跡** (江戸時代) 天正年間(1590年ころ)、清成が建てたところ。元禄13年村民の居地となりました。現陣屋小路に陣屋稲荷があります。なお座間市1の3300番地にある宗仲寺は、慶長8年(1603年)清成が、実父竹田宗仲菩提の為に創建しました。慶安2年(1649年)8月寺領7石4斗の御朱印を賜わり、内藤氏の墓5基があります。清成は現在の東京都新宿を開いた人です。

★**一里塚** (江戸時代) 元和元年(1617年)家康の柩(ひつぎ)が久能山(静岡県)から日光東照宮へ通過する為、道しるべとして作られました。新戸土井下2391番の地に所在します。

★**栗山功教の碑** (江戸末期) 磯部能徳寺前の道路右側の角にあります。明治24年4月門弟により建立されました。旧姓名を渋谷久五郎といい、嘉永2年(1850年)に屋敷内に開塾、明治5年新学制発布により日新学舎の訓導に推され後輩の指導にあたりました。現在の新磯小学校の前身です。

★**小田急線** 昭和2年(1927年)小田急線が開通しました。駅名は「座間駅」。昭和12年6月「士官学校前駅」、昭和16年1月「相武台前駅」と改名せられ現在に至っています。この線の開通により、相模大野、厚木、小田原と東京は交通が急に便利になりました。

★**相武台碑** 昭和14年8月建立。現ザマキャンプ正門を入ってすぐ右側にあります。昭和12年陸軍士官学校が東京市ヶ谷から移転、その年の12月に第50回期生卒業式に天皇が行幸した時、学校の所在地を相武台と命名しました。碑はその由来を示すもので裏面に、時の陸軍大臣杉山大将の筆による碑文が刻まれています。因(ちな)みに陸士の校地は座間丘陵に、および、練兵場は更に北へ麻溝新磯にわたる509万㎡という広いものでした。

★**隧道** (ずいどう：トンネル) (名称不詳) 長さ500m。陸士が出来る際、それまでの道路にかわり作られました。陸士敷地の下を通し、地元民の生活道路としました。

★**磯部頭首工** 昭和15年(1940年)10月竣工。下磯部の北のはずれの河岸にあります。稲作を

中心とする日本農業は灌漑が重要問題でした。寛文年間（1661～72年）、当時の領主久世大和守広之によって始めて作られたと伝えられています。木造の為、洪水による破損が度重なり、費用もかさんだ経緯の後、現在のような堅固なものが出来上りました。以前はここに渡舟場がありました。

★**キャンプザマ基地** 昭和20年（1945年）9月。旧陸士のあとに進駐し、現在に至っています。当時駅前周辺には英字の看板をかかげた店が並び、日本人入るべからず、の多い中で、日本人歓迎の看板が1つあり、目立ったものでした。

★**市制施行** 昭和29年（1954年）相模原町が市になりました。それまでの地名大字新戸字新磯野。同下出口。同上出口等大字と字が無くなりました。

★**県公社相武台団地** 昭和42年（1967年）に完成。入居者2500世帯の中層住宅団地の出現により、この地区の景色が一変し都市的様相になりました。

★**相武台小学校** 昭和43年4月相武台団地建設にともない、初めて小学校が開校。それまでは子ども達は座間や新磯・相模台の小学校へそれぞれ通っていました。現在は緑台小（昭和48年）北相武台小（昭和51年）磯野台小（昭和56年）中学校、県立相武台高校（現在は廃校）があります。

★**住居表示変更** 昭和44年（1967年）7月、旧表示が新しく相武台団地。相武台1丁目～3丁目と変りました。

★**相武台出張所開設** 昭和45年（1970年）行政区が新磯地区から分離しました。世帯数約4100世帯。人口約13,700人でした。それまでは新磯出張所まで出向いていた市役所への手続きが近くで用が足せるようになりました。

★**グリーンパーク住宅団地** 昭和54年（1979年）緑台小学校に隣接して中層の住宅が建設され、図書館、医院、交番、幼稚園、児童館等の各機関も整いました。クリーンパーク周辺にも住人が増えました。現在も新磯野という地名を残しています。

★**相武台公民館設立** 昭和59年（1981年）4月、新磯野3丁目（現在は4丁目に再移転）にあります。相武台支所と同居し、必要に応じて会議室を共同使用していた相武台公民館は新装成ってこの地区の文化。スポーツ・福祉のセンターとして悠々と活動を始めました。利用者も多く、いつも人の出入りが盛んです。

いまの子供たちが相武台をふるさととして巣立った時、緑濃き座間丘陵と相模川の清流を忘れることはないでしょう。そして座間丘陵のはるか向うにのぞむ大山の連山と、広い広い相武台の空。その空の下に建つ近代的な家々をめぐる整然とした道路。私たちは古い歴史を探り、新しい文化を創り出し、風格ある相武台の街づくりに新しい意欲が湧くのを感じます。

昭和59年10月

相武台歴史同好会

開発と自然と文化財

相武台歴史同好会会長 宮原 晟二郎

今から40数年昔のこと、小田急線向が丘遊園の駅で下車し、駅前の通りを遊園地の方へ行かず、真

直ぐに行くと切通しがあり、土の断層の中に白い貝殻がたくさん見られた。手にとって見ると大変もろいものであった。

右手の山の上に病院があり、その下の通りの崖には、多数の洞穴があった。しかし今は、切通しはけずられて無く、洞穴も道を掘げたのでもう見られない。あの穴は一体何だったのか、私は今でも分からない。時々思いだして、大昔の海を連想する。

東京生れの私は、東京の月島、大森近くの梅屋敷、千葉の幕張等で泳いだ。その頃の海は、すぐそばであった。しかし海はもう手も足もとどかない所へ行ってしまった。もし、太田道灌（室町中期の武将・歌人）が見たら、あの松原はどこに行ってしまったのか、と思うだろう。

古い話でなく新しいところでは、座間美都治先生の“相模原の史跡”の151ページの終りに、小田急相模原駅から10分の新戸向出口に、当時の測地学試験場があり、9尺（約2.7m）に62間（約112.7m）の建物で、60間長屋と呼ばれていた、と有る。この場所は現在の地図には載っていない。昨年、金井先生と相模台歴史同好会が、その基石の有るところを尋ねたことがあった。相模台2丁目17番地9号、宮本宅の敷地内であることが分かった。宮本氏の話によると「当時家を造る時、地下から大きな台石が出て来た。何の石か分らず、ようやく60間長屋の東端のもの分ったが、大きくて掘り出せず埋めてしまった。」という。発見当時の写真を保存して居られたので見せてもらった。でも、もう1つの西端の台石は、どこにあるのだろうか。残念ながらその日は、そこまでで日が暮れて終わった。

その後、最近手に入れた古い地図にちゃんと60間長屋の位置が載っていた。今ある略々東西に走る道路より北寄り斜めの方向、真西へ62間辺りにあるはずである。相模野基線の南北両端は、実際に私は見たが、中間点は…地図にはあるが…今は個人の宅地の中らしく、一寸分らなかった。

20年くらい前に私が見た海老名国分寺の礎石は、柵もなく、雑草に埋もれていた。いかにも廃墟という感じがし、今のきれいになっているのより、ずっとよかったと思っている。ようやく探しあてた「尼の泣き水」の供養塔は、畑の崖の所に有り、傍（かたわ）らの農夫に聞いて見たら、子供の頃は水がしたたっていたとの事。今では薬師寺の境内に移されているが、畑の崖にあった方がずっと感じが出ていると思う。たとえ、その場所が最初の所でなかったにしても、である。国の重文である薬師寺の釣鐘も、子供の遊び場になっていた。境内の4本柱の小屋にぶらさがっており、手を触れてみることも出来たが、今ではコンクリート造りの内におさまり、近寄りも出来ない。あまり厳しいのも考え物ではないだろうか。

ひさご塚（海老名市国分南）は丘陵で、後円部の頂上に1本の木があり、それが目印で、小田急の電車の窓からよく眺めたものである。まわりは畑であったが、今は宅地造成でまわりが削られて、その部分だけ突出した形になってしまい、石段を登らないと行けないようになってしまった。

開発によって、変わった文化財の中で、厚木246号国道の船子バイパスに在る地頭山古墳（厚木市船子）のように、下をトンネルにして保存している例もある。当時色々調べた1部が標示板に書いてあった。5世紀前半（約1500年前）の前方後円墳で、前方部は、北向き 幅25m 高さ3m。後円部は直径30m、高さ6m。全長70mと記されていた。厚木を過ぎると、小田急線の車窓からもよく見える。こんもり木の茂った小山のように見える。私がおそを訪れた時、塚下の人に聞いてみたところ、「関東大震災の時、後円部頂上が約2m位陥没し、内の石が見えた」とのことだった。私が「登って見たい」と言うと「低い山だからすぐ登れるよ」と言うので、道なき所を木をくぐり、草を分けて進んだ

が、蔓(つる)が行く手をふさぎ服は蜘蛛の巣だらけ、頂上を目前にして断念して戻った。冬、木の枯れる頃にまた行って、果して60年あまりたった今でも、へこんでいるかどうか見たいと思っている。

私は時々相模川の河原の蘆(あし)の茂った細い踏み跡を歩く。左右は全く見えないで前方も曲りくねって見えず、ただ雲の流れる青空だけが見える時、更科日々の一節を思い出す。『今は武蔵の国になりぬ、ことにをかしき所も見えず浜も砂子白くなどもなく、こひじ(泥土の事)のやうにて紫生子を聞く野も蘆荻(ろてき：アシとオギ)のみ高く生ひて馬にのりて弓持ちたる末見えぬまで高く生ひ茂りて中を分け行くに……』平安時代を偲びつつふと現実にかえると、スポーツ広場、野球場等の名のもとに、あちこちで河原が埋められているが、こんな蘆原も、相模川に是非(ぜひ)残しておきたいものと思っている。東京の隅田川の様にならない為にも。(終)

(以上自然と文化第5号寄稿文より)

金井利平先生講義録抄

鴨立庵と相模原

1. 大磯『鴨立庵』の成立 「旧跡鴨立沢」の碑。大淀三千風(おおよどみちかぜ：江戸前期の俳人。本名、三井友翰。伊勢の人。松島を振り出しに全国を遊歴)が建つ。

・心なき 身にもあはれは 知られけり 鴨立沢の 秋の夕ぐれ 「山家集」 一四行

1) 小田原の宗雪草庵建之 寛文年間

2) 大淀三千風再興入庵 元禄8年(1695)

3) 堂宇記念碑・歌碑

イ. 鴨立庵 円位堂・法虎堂・福德観音堂

ロ. 貞明皇后行啓記念碑

ハ. 西行歌碑 佐々木信綱書昭和26年建 (前記の歌)

鈴木芳如退院記念

昭和37年11月3日建之

ニ. こころいまもいこひいまさむ波の音

松風きよきこの海そひに 九十一 信綱

ホ. 多田茂瞳歌碑 天和3年(1683)建之

あはれおもへむかしの

しぎたつ沢にのこすわが名を

へ、比翼塚(ひよくずか：相思の男女を、いっしょに葬った塚)

ト. 松本順「守」 石の記念碑

海を臨む小丘に林立している

一世 大淀三千風 元禄13年西行500年忌に建之

二世 朱人 ちり塚に もろしや花の 菜大根

三世 白井鳥酔 蕉村と並び称さる天明6年(1786)鴨立庵に没。

- イ. 碑の表 鴨立庵一世鳥醉翁碑
 碑陰 大島や 波に寄せたる 雪の船
- ロ. 鳥醉外二門人句碑 (門前)
- 夕風や 磯山近く ききす啼 鳥明
 しみじみと 見れば黒きを 寒念仏 醉居士
 明月や 人静て 秋の月 百明
- 四世 杉坂百明 西東 啼べき夜なり ほととぎす
 五世 加舎白雄 吹つくし 後は草根に 秋の風
 六世 西奴 雨すぎて 夜さむのからず 啼にけり
 七世 三浦紫居 夜をひと夜 おもへばながし 松の箱
 八世 倉田葛三
 九世 遠藤雉啄 心ほど 世は経がたくも 散桜
 十世 島田立宇 月まどか まどかと独り 寝ぬ夜かな
 十一世 大島寿道 行ききは 人まかせなり 更衣
 十二世 菅喜田松頂 葉一枚 落るかせより 秋暮
 十三世 間宮守山 明行や 桜はさくら 月ハつき
 十四世 二宮松汀 大島は いほのとなりよ 今日の月
 十五世 原昔人 俯向て 沢の音きく 時雨かな
 十六世 高瀬蘇迷 竜神の あゆむ跡より もゆる草
 十七世 神林時処人 山は来て 落葉ふむこと あたたかき
 十八世 鈴木芳如 春の海 ささら波して 遠からず
 十九世 山路閑古 大磯の 波もとどろと 今日の月
 廿十世 村山古郷 現庵主

2、相模原における加舎白雄の門下

淵野辺の柏樹と志計

1. 栢樹(かしわぎ) 加舎白雄 (1738~1791) 門下。白雄22回忌の句集、に作品が見られる(白雄門下3000人より伊奈の伯先が選出)「栢樹 淵野辺大椿庵」と記さる。竜像寺住職と思わる。「春秋稿」その他に多くの句を残す。

くもの子の ちるや風呂屋の 夕けふり

安永9年序「春秋稿」

やなぎ植し その夜を月の 朧(おぼろ)かな

天明2年序「春秋稿」

春秋叟と送る途中

いなづまに かれ竹藪(やぶ)の あらし哉(かな)

天明4年序「春秋稿」

都辺(みやこべ)や 海をうしろに 瓦(かわら)やき

天明6年「葛の葉表」

2. 志計

あさがほや 馬に鞍おく 木賃宿(きちんやど：旅人に自炊させて泊めた宿屋) (同右)

上溝 宝光寺

秀珍山 曹洞宗 本尊釈迦 寺領8石7斗 間基 佐藤対馬

もと向西庵、本郷部落、大石源左衛門定久(真月斎道後と妹向西尼 住)。

遠祖大石信重、山内上杉の被官 滝山城主

川越の戦いに敗る 天文15年(1546)

北條氏康次男氏照婿。天文18年自刃(じじん：刀で自分の生命を絶つ)。

北條遺臣佐藤対馬(上溝村名主)伽藍建立。開基となる。

「啼雲齊風吟翁」碑 1.5 m

撰文ならびに書 下野烏山城主大久保忠成、本名恭山愚謙 俗姓片野氏

西之根部落出身。竜像寺15世、宝光寺18世袁中郎流搜花を極む。弘化4年没 83才。

淵野辺 竜造寺 淵源山曹洞宗 広沢寺末。

1. 淵野辺義博の伝承 ・大蛇退治 暦応年間(1338～1341)竜頭・竜象・竜尾の三ヵ寺建立。護良親王をかくまう。石巻へおつれした。

2. 竜造寺再興 巨海和尚弘治2年(1556) 本像 釈迦如来。寺宝 竜骨矢じり

3. 旗本岡野家代々の墓 先祖板部岡越中守融成(号江雪) 伊豆田方郡出身、密宗の僧、傑物であった。3代氏康の右筆。4代氏政の奉行衆、小田原北条滅亡後、秀吉・家康に仕う。次男岡野房次の子英明、1500石淵野辺村知行。貞明(英明次男)3代をつぐ。友明(英明3男)岡野分家、両家とも子孫ひきつづき世襲し幕末に至る。

1. 白井鳥酔

昭和56. 6. 13 (土)

「しみじみと みれば黒きを 寒念仏(かんねんぶつ：寒中、早朝山野に出て声高く念仏を唱える修行)」における寒(大寒・小寒)について

(1) 二十四季 日本中国において太陽の黄道(おうどう)上の位置で分けた(1年を)24の陰曆上の時期。5日を一候、二候で一気、1年間を24季に分ける。(24節)

春 立春、雨水(うすい)、啓蟄(けいちつ)、春分、清明(せいめい)、穀雨(こくう)。

夏 立夏、小満(しょうまん)、芒種(ぼうしゅ)、夏至、小暑(しょうしょ)、大暑(たいしょ)。

秋 立秋、処暑(しょしょ)、白露(はくろ)、秋分、寒露(かんろ)、霜降(そうこう)。

冬 立冬、小雪(しょうせつ)、大雪(たいせつ)、冬至、小寒(しょうかん)、大寒(だいかん)。

(黄道：地球が静止していると考えて、天球上を太陽が1年間に通る道、つまり太陽のみせかけの軌道)

(2) 節中

1月 立春 雨水	2月 啓蟄 春分	3月 清朗 穀雨	4月 立夏 小満
5月 芒種 夏至	6月 小暑 大暑	7月 立秋 処暑	8月 白露 秋分
9月 寒露 降霜	10月 立冬 小雪	11月 大雪 冬至	12月 小寒 大寒

2、相原村小川家

「社稷準繩録(しゃしょくじゅんじょうろく)」

文化12乙亥年正月11月 吉例恵方ニ向ッテ畑ヲ耕ヤス

3月11日 芋植 3月ノ中ハ14日也、

3月13日 3月ノ中ハ14日也。

栗糞ねる 124ざる、げす8荷、少し遅し

3、大化の改新により律令政治が確立

地方は国、郡、里(郷)に分けられた。

相模国高座郡は13郷一駅となる。和知抄(倭名類聚鈔)

高座郡の名 初出

日本書紀 天武紀4年(676)冬10月此の日相模国言うす高座郡の女人3男を生む」

・十三郷一駅 美濃、伊参、有鹿、深見(布加美)、渭堤、寒川(佐無加波)、塩田(之保多)、駅家、二宝、岡本(乎加毛止)、土甘、河合、大庭(於保無波)

平安初期承平年中(931~938)醍醐天皇第4皇女勤子内親王の命により源順(みなもとのしたごう)が編纂(へんさん:材料を集め、整理・加筆などして書物にまとめる)した。

江戸幕府の相模原農村の支配

(昭和56.2.14日講)

1. 慶安の御触(おふれ:役所から一般民衆に出す布告)書

その中の一条

「大茶ヲ飲ム女房ハ離別スベシ」

妻は理由もなく一方的に離縁状を渡された。相模原の百姓の「離縁状」の一例

一札之事

一、其方儀 我等心底ニ不相叶(あいかなわず)

此度乃離縁候 以後 何方江(このたび りえんそうろうおよび いご いずこへ)

縁付候共 於我等一切故障(えんづきそうろうとも われともにおいて いっさいこしょう)

無之候 仍而 如件(これなくそうろう よって くだんのこと)

文政10 丁亥年(ひのといていがい) 弥七

7月20日

おなみどの

⑨文政10年は江戸時代の後期

2、江戸時代における支配者の考え

徳川家康とその懐刀(ふところがたな：秘密の計画などにあずかる近臣)といわれた本多佐渡守正信、江戸時代中期の勘定奉行神尾若狭守春央のことは

徳川幕府の農民観

百姓ハ天下の根本ナリ。是ヲ治ムル法アリ。先一人一人の田地ノ境目ヲヨク立テ、扱テ一年の入用作食ヲ積ラセテ 其余リヲ 年貢ニ取ルヘシ。百姓ハ財ヲ余ラスヤウニ 不足ナキヨウニ 治ムる事道也
(本佐録：江戸前期の代表的政道書の一つ)

百姓は飢寒に困窮せぬ程に養ふべし。豊かなるに過ぎれば農事を厭ひ、業を易ふる者多し。困窮すれば離散す。東照宮上意に、郷村の百姓共は、死なぬ様に、生きぬ様にと合点致し、収納申し付くる様にとの上意は、毎年御代官衆、支配所へ御暇賜る節 仰せ出されしと云へり。(昇平夜話)

胡麻ノ油ト百姓ハ 絞レハ校ル程 絞レルモノナリ (神尾若狭(かんおわかさ)守春央)

(昭和56、3、19日講)

1. 大化改新と相模原

1) 飛鳥浄御原(あすかきよみはら) 宮跡の発掘

天武天皇の宮殿

・奈良時代までの天皇

29代：欽明(538) 30代：敏達 31代：用明 32代：崇峻 33代：推古
34代：舒明 35代：皇極 36代：孝徳 37代：斉明 38代：天智 39代：弘文
40代：天武 41代：持統 42代：文武 43代：元明

・蘇我馬子(そがのうまこ) - 蝦夷(えみし) - 入鹿(いるか)

・飛鳥時代 仏教文化と聖徳太子(574~622)……中央集権国家を作り、国家を安寧に統治するため、仏教の力を利用。

・山背大兄王(やましろのおおえのおう：?~643)の変……643年、蘇我入鹿は不意に山背大兄王の屋敷を囲んで責め立てたが、王は一度は山の中に隠れました。「東国へ逃げて、そこで兵を集め蘇我入鹿と戦いなさい」との助言があったが、王はこれを断り「自分のために人々を殺したくない。自分の命を蘇我入鹿に与えれば済むのだ」と応えて家族と一緒に自殺した。

・大化の改新(645~) 中大兄皇子と中臣鎌足……中大兄皇子(のちの天智天皇)・中臣(藤原)鎌足らが蘇我氏を打倒して始めた古代政治史上の一大改革。蘇我蝦夷(えみし)・入鹿(いるか)父子を滅ぼした。中大兄皇子は孝徳天皇を即位させ、自らは皇太子として実権を握った。

・白村江(はくすきのえ、はくそんこう)の戦(663)……朝鮮半島の白村江(現在の錦江河口付近)で行われた百濟復興を目指す日本・百濟遺民の連合軍と唐・新羅連合軍との間の戦争。

・壬申の乱(672)……天智天皇の子大友皇子と同天皇の実弟大海人皇子(おおあまのおうじ)との間で起こった皇位継承をめぐる争い。一か月余の戦いの結果、大友皇子は自害。

・白鳳時代(645~710) 仏教文化……天武天皇は伊勢神宮を中心とする神祇制度の整備を進

めたが、同時に仏教も篤く保護するとともに、国家による統制を強め、国家仏教の確立をめざした。

・大宝律令（701）……日本古代の基本法典。大宝1年に制定。七世紀以来の諸制度の法的整備を示し、7557年養老律令施行までの国家の基本法となった。

2) 相模国の国府

地方は相模とか武蔵とか出雲のような国に分けられ、国の中に郡、郡の中に里（郷）がおかれた。国の長官を国司といい中央から派遣された。郡や里の長は土地の有力者になった。相模国分寺の建立 天平13（741）年。

2、家康の江戸お討入りの日天正18（1590）年

八朔（はっさく：古くは農家で、新穀の贈答や豊作祈願・予祝などの行事が行われた）、田の実の祝（民間行事：鎌倉中期以降、主に武家で、家臣が主君へ太刀・馬などを献上し、主人よりの返礼を受けて君臣の誓いを新たにす儀式）。陰暦8月1日。

・贈りものの交換、現在の中元と同じようなもの、たのみ奉行～将軍家への贈り物を受け付ける奉行。

小田原落城によるお国替え

家康の側近（重臣）榊原康政・内藤清成

青山忠成：家康の信任が厚く、天正13年（1585年）に家康の三男・秀忠の傅役に命じられた。天正18年（1580年）、家康が関東に移封されると江戸町奉行に任命され、5,000石の領地を与えられた。さらに、文禄元年（1593年）には2,000石加増された。

同心円状の所領配地 一夜泊りの地

相模原16か村 相模野をめぐって分布

相模川筋……譜代大名領

境川筋……直轄領・旗本知行地

江戸時代（初期）

16か村

上矢部新田の開発 延宝年間（1673～1680）

清兵エ新田の開発 天保4（1843）以降

上の2村を加えて18か村となる、明治22年町村制施行により18か村は7か村となった。

3. 大阪夏の陣

大阪夏の陣 元和元（1615）、海外渡航の禁 寛永10（1633）年

島原の乱 寛永14（1637）年、外国貿易の禁（オランダと中国とのみ通商—鎖国完成） 寛永16（1639）年

慶安の御触書 慶安2（1649）年

スペイン国王に日本に軍臨せんことを望む書、イスパニア国王に上りし書翰

（前略）此の如く広大にして繁栄なる大王国に進入することの、陛下に有利なることを立証するには多言を要せず。予は此地に欠けたる唯一の事は、陛下を其王又本然の君主とすることなりと思惟し、如何なる方法に依りて此事を可能ならしむべきかを熟考し、武力の途の閉鎖せられたることを発見せり。

何となれば、たとえイスパニヤより此の如く遠隔ならずとするも、住民多数にして城郭堅固なるが故に、之を攻略することは不可能なればなり。

但しサンフランシスコ派宣教師の殉職したる帆船サン・フェリペに対する暴行及び最近のマカオ船の事件に依り開戦の正当なる理由を得たれば陛下の良心は平安なるべし。

武力に依る侵入の困難なることを真に確實なりとすれば、我号の主なる神の開き給える聖福音伝により、彼号をして陛下に仕ふることを喜ぶに至らしむる外選ぶべき途なし。

1610年5月付、豊後国臼杵発、ドンロドリゴより
イスパニア国王に上りし書翰(しょかん)

慶安の御触書(おふれがき)

昭和56.4.11日講)

諸国郷村に被仰出(おほせいだされ)

一、公優御法度を怠り地頭代官の事をおろそかに不存、扱又名主組頭をハ其の親とおもうべき事(中略)
一、朝おきを致し、朝草を刈、昼は田畑耕作にかかり、晩にハ繩をない、たわらをあみ、何にてもそれぞれの仕事無油断可仕事

一、酒茶をのみ申間敷候、妻子同前之事(中略)

一、正月11日前に毎年鋤(くわ)のさきをかけ、かまを打直し、能きれ候様ニ可仕、悪きくわにては田畑おこし候にはかゆき候はず、かまもきれかね候得ハ同前之事(中略) 一、百姓は分別もなく末の考えもなきものに候故、秋ご成候得ハ米穀をむぎと妻子ニもくわセ候、いつも正月2月3月時分の心を持ち、食物を大切に可仕候ニ付、雑穀専一に候間、麦粟稗菜大根其外何に而も雑穀を作り、米を喰いつぶし候ハぬ様に可仕候。飢饉之時を存じ出し候得ハ、大豆の葉あづきの葉ささげの葉いもの葉などむぎとすて候儀ハ、もったいなき事に候

一、男ハ作をかせぎ、女房ハ苧(う=アサの古名)はたをかせぎ夕なべを仕、夫婦ともにかせぎ可申、然ハみめかたちよき女房成共、夫の事をおろそかに存、大茶をのみ物まいり遊山すきする女房を離別すべし、乍去子供多く有之て前廉恩をも得たる女房ならハ格別なり。又みめさま悪シク候共、夫の所帯を大切にいたす女房をはいかにも懇ニ可仕事(中略)

一、百姓ハ、衣類之儀、布木綿より外ハ帯衣裏ニも仕ル間敷キ事(中略)

一、春秋灸をいたし煩候ハ又様ニ常ニ心掛べし、何程作ニ情を入度と存候而も煩候得ハ其年之作をはずし身上つぶし申ものニ候間、其心得専一なり、女房子供も同前之事

一、たばこのみ申間致候、是ハ食にも不成、結局以来煩に成ものに候、其上隙をかげ代物も入、火の用心も悪候、万事ニ損成ものニ候事

一、親に能々孝行之心深くするべし、おやニ孝行の第一ハ其身無病ニて煩候ハぬ様ニ、扱又大酒をのみ喧嘩すき不仕様に身持を能いたし、兄弟中よく、兄は弟をあわれみ、弟ハ兄ニ随ひ、たがいにむつまじけれハ、親殊之外悦ものニ候、此趣を守り候得ハ仏神之御恵もありて道ニも叶、作も能出来、とりみも多く有之ものニ候。何程親ニ孝行の心有之も、手前ふべんニ而ハ成かたく候間、なる程身持を能可仕

候、身上不成侯得ハひんくの煩も出来、心もひがみ又ハ盗をも仕、公儀御法度をも背、しぼりかなめられ、籠に入、又は死罪はり付などにかかり候時ハ、親之身に成てハ何程悲しく可有之候、其上妻子兄弟一門之ものニもなげきをかけ、恥をさらし候間、能々身持を致し、ふべん不仕様ニ、毎日毎夜心掛申べき事

(下略)

慶安2丑年2月26日

・有名な「慶安の御触書」といわれるものである、慶安2(1349)年発布されたもので、全32カ条から成り、農民の日常生活に対する細かい心得が記されている。まず封建制の秩序を守ること、耕作に精を出し農事に注意を怠らず年貢を必ず出すように心がけること、そのためにはなるべく雑穀を多く食べ米を食べないようにする。

そのほか、タバコをのまず、病気をせず、孝行第一にして身持ちをよくし、罪科にかからぬようにすること、等と実に微に入り細をうがった注意が記されている。領主は農民にあらゆる面から規制を加えて、封建体制を維持せんとしたのである。

宝寿堂樹徳と伊東方成

(昭和56.7.11日 講)

1. 宝寿堂樹徳

1) 生没 相州高座郡下溝村大下に生まる。元禄初期と思われる、宝暦10年(1760)4月28日没

2. 家業 代々小山儀右エ門を名乗り、名主その他の村役人をつとめ、農業のかたわら、酒造業、質屋を営んで家号を「綿屋」といった。家伝の薬種「瓊玉円(けいぎょくえん)」を売る。*(ローガイの薬)。薬種支店……江戸日本橋通3丁目武石エ門店(だな)(天明初年、小山家文書にあり)

3. 寛延4年(1751年)11月 師、自在庵祇徳を迎(むか)う

「待ち待ちて 笠やあられの 旅姿」

寛延2年(1749)2月17日、排友祇仙と日光東照宮へ、3月2日帰宅

「いとゆふ(かげろうのこと)の 空にたふとき 日の出山」 樹徳

「東照る(美しく輝く) 神の恵や 世はのどか」 祇山

同年6月箱根へ。磯部から馬入へ舟で下る。

「百合に眼を 残して行くや 下り舟」

樹徳作「温泉の日記」残存する。

4. 樹徳句碑「月に名の あれや箱根の 青葉ごろ」塔ノ沢から宮ノ下への下り崖道。

弄花編「七湯の葉(しおり)」に載る。(箱根の地誌)

5. 樹徳句集 26冊残存

名所遍歴、社寺参詣多し。家業にもより専念、家運高まる。「日光紀行」序

「予は老たる父母につかえて風月よりも重き家業の余力(家業を終えたのちになお余っている

力) を求めずー」

「しかはあれど慈にとどまるの道ありてー」

伊東方正

- 1) 生没 天保3年(1832)上溝村久保(現歌人鈴木雄次郎方)医師鈴木方策長男として生る。明治31年(1898)5月2日、67才で長逝(ちょうせい)。玄伯と改名。
- 2) 番田の井上篤斎に学び、次いで蘭医伊東玄朴に師事、養子(娘の婿)となる。
- 3) 伊東玄朴 肥前の人。シーボルトに師事、文政9年(1826)江戸開業佐賀藩主鍋島侯の侍医。のち蘭医として幕府の奥医師。種痘所を設く。のち幕府経営の西洋医学所(現在の東大医学部前身)。かたわら「象先堂」(塾)経営、人材養成にあたる。
- 4) 長崎でポンペ(オランダの軍医)に師事。文久2年(1862)林研海らとポンペに同行、オランダ留学(最初の海外留学生)。明治元年(1868)帰国。明治新政府の図書少允(ずしょしょうじょう)、次いで典薬寮医巫、方成と改名。
- 5) のち大学中博士、大典医として、明治天皇侍医。宮中都用掛として皇太子(大正天皇)ご養育に献身、皇位継承の大任を完うした。
- 6) 明治31年改仕、従3位勲1等、宮中顧問官、侍医頭。

相模原における江戸時代の旗本

(昭和56.9.12日請)

1. 板部岡越中守融成(とおなり)<号江雪>もと修善寺の僧。伊豆田中郡田中郷出身。密宗の僧、小田原北條に仕う。三代氏康の祐筆(ゆうしつ:文書・記録の作成をつかさどる)、四代氏政の奉行衆、小田原北條の滅亡後、秀吉・家康に仕(つか)う。秀吉から岡部の姓を賜わる。
2. 小早川秀秋に対する説得 江雪(融成)説得に当たる。
関ヶ原合戦、東軍の勝利を導く。次男岡野房次の子英明、淵野辺村地頭となり1500石を領す、英明次男貞明、三代を継ぎ、その弟三男友明分家す(岡野分家)両家とも幕末に至る。
竜像寺第18世住職は岡野家より入る。
九代岡野孫一朗融政(とおまさ)晩年の庶子を名主鈴木多平に依頼。番伝と名のり、のちに巨海、初白と改名
3. 淵野辺村 江戸中期以降、三給支配
旗本岡野本家・分家・下野烏山藩(大久保氏3万石)
寛永3(1626)200石、岡野権庄ニ門英明拝賜
残20石御料、寛文4(1664)久世広之足石、
延宝2(1674)検地により石高旧に倍し、岡野両家に分配
239石9斗6升8合 岡野孫九郎貞明知行
225石3斗7升8合 岡野孫十郎友明知行

享保13(1728)年 宝永4(1707)年、享保8(1723)年の新田開発による石高増加分399石余は大久保山城守常春所領

かくて三給の総石高999石5斗になった。その後文政両度の瀏野辺新田開発の分96石7斗2升8合は江川太郎左エ門支配となる。

4. 明治5年、明治政府太政官正院(歴史課・地理課)による調査、幕末における旧領旧高取調
相模国高座郡瀏野辺村

江川太郎左エ門支配所 197.390

神奈川県 烏山藩領分 399.5910 烏山県岡野平次郎知行所 272.8298

神奈川県 岡野房太郎知行所 271.1052

神奈川県 竜像寺領 12.0000 同管課

明治初期における諸改革と世相社会の動き

(昭和56.11.21日講)

1. 幕末における旗本岡野宗

瀏野辺村地頭、第九代岡野孫一郎融成(号厚雪)の庶子、竜像寺第18世住職となり、泰伝と称した。後、巨海初白と改名、瀏博学舎の教員となる。

2. 明治維新における諸改革

國家神道の確立 祭政一致……太政官布告
社僧還俗令・廃仏毀釈・望地弁財天の場合
学制発布 寺小屋は小学校に

3. 教員、巨海初白と安田蔵宗(ぞうそう)の届書

第一百号 学校教師を教導職ヨリ勤務セシメ候儀 相成ラズ候 此旨相違シ候事
右御布達ノ趣承知仕り候得共、拙僧ノ儀末々教導職ノ拜命ハ仕ラズ候 以上

明治6年第11月6日

第20区4番組橋本村本然学舎(ほんぜんがくしゃ)教員瑞光寺(ずいこうじ)住職

安田蔵宗 印

第20区3番組瀏野辺村瀏博学舎教員竜像寺住職

巨海初白 印

4. 明治初期の相模原の村々

村政のしくみ……大区小区制

○区画改正の告論 明治6年4月 県令大江卓

相模国高座郡第20区1番組から9番組まで編成 27か村。

2番組：上鶴間村・下鶴間村。3番組：鶴野森・瀏野辺村・上矢部村・上矢部新田村。4番組：清兵エ新田村・小山村・橋本村・相原村。5番組：上九沢村・下九沢村・大島村。6番組：田名村。7番組：上溝村・下溝村。8番組：磯部村・新戸村。

○神奈川県管下 大区小区・戸長制 明治8年7月

第20大区会所下溝村、区所田所範高、学区取締大矢弥市。

第2小区戸長：下鶴村浜田平左エ門、副戸長古木清左エ門（上鶴間村）。

第3小区戸長：澁野辺村河本崇蔵。

第4小区戸長：橋本村牛久保長栄。

第5小区戸長：下九沢村山本作左エ門

第8小区戸長：中村喜右エ門（磯部村）

5. 安田蔵宗履歴書 神奈川県学務課へ提出

第20区 4番組相州高座郡橋本村 本然学舎教員 安田蔵宗 酉29才9か月

第1大学区9中学区第188番小学校

安政2卯年春3月、東京愛宕下青松寺へ禅学寄留、同年8月ヨリ文久3年正月まで9年間、同下谷三枚橋漢学者大沼捨吉方へ通学仕り同年また青松寺に於て首座職相勤め候、慶応元年2丑3月15日相州高座郡田名村宗祐寺師室ニ於テ首事職嗣法仕り慶応3下卯8月5日右瑞光寺へ住職仕り同年冬10月ヨリ生徒授教罷り候也

右之通相違無御座候 橋本村本然学舎世話役 牛久保政五郎 印

明治6年9月11日

神奈川県学務係 御中

右之通式通相認(したた)メ取締へ提出、同9年18日検査の上教官拝命ニ相成候、即チ御辞令書頂載、文面略ス、、、

6. 小学校入学生徒の保証人証書 本然学舎入学

此ノ度入校御願上候上 御規則堅ク相守り束 等相意無ク差出シ申可ク候也

第20区4番組橋本村 生徒権次郎 12才 証人 農 相沢安次郎 印

生徒菊太郎 酉8才 証人 同 相沢安次郎 印

生徒関五郎 酉9才 証人 同 相沢多七郎 印

後見 相沢安次郎 印、世話役 牛窪政五郎 印

明治6年第9月開校 本然学舎教員 御中

7. 「相沢日記」抜粋 筆者相沢菊次郎

明治21年9月11日 兄横浜安田へ見舞ス

昨日午後3時頃、横沢老松町安田米斎(べいさい)内室(ないしつ)ヨリ、米斎師病氣ノ処、本月8日午後4時頃 重り候ニ付、通報ストノ書面達セリ、且ツ吉田屋及滝山へモ御伝(でん)声アリ度！追書アリ略

9月13日 吾師 安田米斎死去ノ事

兼テ兄ガ出頭中、吾師安田米斎ノコト如何(いか)アラント思ヒ居タルニ、本日新聞紙上ニ、本月10日正午12時、遂ニ遠逝ストノコトアリタリ、惜哉(おしいかな)、5日師君ト一驚ス、同師ハ瑞光寺ノ住職ナリシ頃、吾兄弟ハ四、五年間、教育ヲ受タリ、明治8年横浜へ行き住居ス、吾兄弟数回行き情義殊ニ密ナリ、ノ予家父(かふ)、同氏ニ本村地図ヲ作ラシム 一略一

9月14日 安田米斎ノコト

本日午後7時、兄横浜ヨリ帰ル、兄ハ11日午後1時発足セン故、東京迄行タルニ9時トナリ、余儀ナク同所ニ泊シ、12日横浜老松町ノ旧苦楽府(らぶ)住宅へ参ル、干時(ときに)米斎ハ柩ノ中ニアリテ見ハ能ハズ、妻房女ハ兄及ビ暉一君ヲ見ルヤ、ドット臥シテ落海ノミ、二人モ為ニ歎動セリト云フ、曾(かつ)テ安田師ノ死スル前日、遺言(ゆいごん)セント云フガ、当時有名ナル福夏柳圃君ニ、自身平素ノ志ヲ以テ、死後石碑ヲ立テ呉レタキト云ヒ、又愛甲郡三増村俳名(以静)、此人ハ元ヨリ懇情ノアル人ニテ、是レヘモ死後ノコトヲ頼ムト云ヒ、且ツ生地大山ヨリ来会スル米師ノ弟、亡安田義明氏ノ?聳、他ノ縁人及米師ノ妻ノ弟、東京人一人ヲ集メ死後ヲ言置タルコトアリテ後、追々汐ノ引如ク遂ニ其俛黄泉ノ客トナリシト、妻君涙ヲ拭フテ咄(はな)セシト、是レヲ兄ヨリ伝聞(でんぶん)シ痛悼(ついでう)ノ至リココニ記ス、又埋葬(まいそう)ニハ12日午後3時出テ、神奈川本覚寺ニ埋ム、大安恕斎居士靈位トナル、合葬人ハ横浜豪商紳士50名程、知事沖守固ノ代参モアリシト云フ。此日米師本県書記ヲ勤メ勤勞ノコトヲ以テ、金式十円ヲ支給セラレシト云フ、神奈川県庁ヨリ、(以下略)

会員名簿：昭和55年～59年・順不同)

番号	氏名	住所	備考
1.	宮原 晟二郎	相武台団地2-7-5-23	会長
2.	久保田 浩子	相武台1-25-10	副会長
3.	金子 静	〃 3-26-19	会計
4.	羽田 やすえ	相武台団地2-1-2-14	監査
5.	谷口 千鶴子	〃 2-1-1-42	記録
6.	木村 富美子	新磯野1-5-5-307	連絡
7.	服部 たき代	相武台団地2-2-1-44	
8.	鈴木 英	新磯野4-6-5-106	
9.	竹野 和嘉子	相武台団地1-6-22-12	会計(補)
10.	星野 亀興三	相武台1-10-18	
11.	二瓶 正己	〃 1-10-17	
12.	野口 章恵	相武台団地2-1-1-33	記録(補)
13.	宮永 孝子	相武台3-17-3	
14.	大畑 徳子	相武台団地1-6-5-26	
15.	永田 二生	〃 1-6-12-14	監査
16.	磯崎 陽子	〃 2-2-5-41	
17.	後藤 きく子	〃 2-2-3-17	
18.	八束 満寿子	〃 2-2-11-11	
19.	林 大輔	〃 1-5-10-46	
20.	林 登代	〃 1-5-10-46	
21.	小林 八重子	〃 2-6-7-28	
22.	平松 トク	〃 2-7-1-18	

23.	清水	澄子	新漁野5-14-2	連絡
24.	大銅	桂子	〃 4-7-5-5-307	
25.	富永	ナル子	相武台2-12-16	会計
26.	山崎	弥生	〃 2-6-5	記録(補)
27.	久野	綾子	相武台団地2-2-10-34	
28.	金成	幸一郎	〃 2-7-2-22	
29.	高橋	喜久栄	〃 1-5 8-22	
30.	岡本	芳子	〃 1-5-12-33	
31.	金子	美知子	〃 2-2-7-14	
32.	萱野	絹江	相武台2-24-13	

昭和60年2月1日現在

まとめ

今後の展望

本誌は昭和55年1月発足から同59年12月まで5年間の相武台歴史同好会の歩みの足あとです。ひとくちに10年ひと昔といいますが、時を刻む速さは大昔と少しも変わらないのに、現今の世相の移り変りの激しさは、10年もすれば足あとも消えてしまうかもしれないと思い、この辺で一応振り返ってみるのも又意義あることと、まとめてみました。

相武台のルーツを探ろうと出発した会ですが、相武台を知るにはまず周囲を知ろうと、方々へ出かけて行きました。物語りの中でしか知らなかった人物や出来ごとの史跡が案外近くにありました。金井先生の講義では郷土相模原の歴史を学習しましたが、その原因となる時代背景や多かれ少なかれその影響を受けたであろう先人のくらしを考えました。こうしてみると、見慣れている地形や野の草までが、新鮮に懐かしくも映るのでした。一方自然破壊も気になりました。それなりに保存の配慮がなされている時には嬉しく、関係者のご苦勞を推察し、相武台でも将来必要になるかも知れないと、こまかい点までよく調べてみたりしました。

5年という歳月は、会員の顔ぶれを大分変えました。他方へ引越したり、病気をしたり、別の勉強を始めた為に忙しくなったり……。しかしまた新しい会員も増えました。

歴史散歩のしおりは毎回、宮原会長が、文献をもとに、実際に下見をした上で作り、書記係が清書しました。会員の家族の方が表誌に絵を画き添えて飾って下さり、コピーされ、会員に配られました。下見には会員有志が同道したことも度々でした。又或る日は、本厚木駅前のバス停で出会った見知らぬ二人連れの婦人から請われるままに、一日会員としてご一緒して全コースを歩いたこともありました。

写真は大切な記録となるものですが、始めの頃は会長や会員の中で出来たものを提供していましたが、会として係りを定める必要があり、現在はその道に明かぬ永田さんが担当しています。

ことし(昭和60年)からは鳩川べりを探ることになりました。いずれはお隣の座間市を見る日もあるでしょう。座間は古くから交通・政治の要衝であった土地ですから、何年も楽しめると思います。隠れた史跡の発掘もしたいと思います。金井先生のご講義を基にして、時代別に分類し、コースを選び

出して、実際に（遠方へも）歩いて見るのも、その時代の人の暮らしを感じとることができて、一層面白いのではないのでしょうか。

どなたからの言葉、「絹の道・橋本遺跡・足柄峠・キャンプザマ基地内ほか、楽しく参加させて頂きました。今は欠席勝ちですが、どうか長い目で見て、いつまでもおつき合い下さい。それにしても、こんな良い会ですから皆さんに広めてお仲間をもっと増やしたいですね」と。そう、二万年も前からの人類の足あとを勉強している私たちです。のんびりと和やかに学習をつづけて行きましょう。公民館にも通い慣れました。多くの良き友もできました。「自分以外はみな師」という言葉を思い浮かべます。本誌が歴史を愛好する方々のサークル活動に、少しでも参考になれば幸いです。

※本稿は会員の皆さんのお話しをもとにしてまとめました。（久保田）

（あとがき）市内には郷土を研究する会が戦前からのも含め、知るだけでも10団体余。相武台はまだ始まったばかりの会。先輩の他団体や次代を担う若い世代のサークルとの交流の必要を痛感する秋です、古きを訪ね、新しきを知る為にも……（久）

相武台歴史同好会 5周年誌 昭和60年12月1日発行

発行人 相武台歴史同好会 代表者 宮原 晟二郎

事務局 相模原市相武台団地2—7—5—23

印刷所 会員（公民館にて）

製本 座間タイプ印刷社 0462 (53) 3622

